

505
56

0m 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10¹⁸/₇₀m 1 2 3 4 5

始



支那風物叢書
第六編

辻聽花著

支那芝居 下卷

發行所 支那風物研究會

505-56



支那風物叢書第六編

支那芝居

辻聽花著

支那・北京

支那風物叢書



寄贈本



支那風物研究會の趣意

支那を觀る日本人は、必ずその最後に「支那は不可解なり」と斷定して其目を閉ぢるの憾みがある。これは觀者が、日本の尺度を以て支那の大を計らんとし、或は明を暗中に探らんとする梟の如き目を見張るからである。若し支那尺を以て計り、明中に明を探ぐる尋常の眼を以て見たならば、支那は必らずしも不可解の國ではない。吾徒は在支十數年。尋常の眼にて觀、支那の尺度を以て計り得たるものを蒐めて、これを汎く江湖に頒たんとするものである。若しこれが、觀者のために平凡なる羅針盤たり得れば、この企圖は有意義であると、吾徒は満足する。

支那風物研究會會則

- 一、本會を支那研究に便宜多き北京に置く
- 二、本會は支那の風俗、文物、其他一般社會に關する事項を具體的に研究刊行するを目的とする
- 三、刊行物を「支那風物叢書」と題し、贊助員並に會員に頒布すると共に一般に販賣する
- 四、「支那風物叢書」は大概毎月一回、二十日を發行期とし百二十頁以上とする
- 五、贊助員は會費其他を以て本會の舉を翼賛し、會員は毎月叢書代銀一弗を負擔するものとする

支那芝居(下卷)目次

| | |
|--|----|
| 一三、脚本 | 一 |
| 脚本の種類—脚本作者—脚本の出處—脚本と時代—劇中の人物—脚本の組織—正角と配角—配合の人物—脚本の特色—脚本の台詞—崑劇の台詞—脚本の歌句—崑劇の歌句—文學的價值—出場の人数—一齣の時間—禁止齣 | |
| 一四、劇目(藝題) | 二七 |
| 第三 俳優 | 三〇 |
| 一、俳優 | 三〇 |
| 全國の俳優—俳優の出生地 | |
| 二、俳優の出身 | 三二 |
| 三、科班の組織 | 三三 |
| 科班の組織者—學生の入社—學生の年齢と種類—學生の分科—學生の名前—芝居の教授法—社内の取締—學生と文字—學生の起居—學生の食事—學生と健康—學生と劇場—卒業後の狀況 | |

四、俳優の名……………五
 昔と今—小の字花の字—處と紅……………五六
 五、俳優の等級……………五六
 非常な尤物—男女と子供……………五六
 六、子供役者……………五八
 七、俳優の給料……………五九
 八、俳優雜俎……………六〇
 俳優の地位—家傳と一代—俳優の附屬者—俳優の住居—俳優の風俗—俳優の飲食物—俳優の夫婦—女優と結婚—俳優の品行—俳優の氣質—俳優の財産—生命と老後—俳優の親方—師匠と徒弟—驟子の養生—俳優と學問—俳優の詩作—俳優の娛樂—俳優と書畫—俳優と信仰—俳優と迷信—俳優と寫眞—俳優の似顔—俳優の最負客—俳優の名刺……………六〇
 第四 劇場……………八九
 一、劇場……………八九
 常設と假……………八九

二、劇場の外観……………九一
 三、舞台……………九二
 大圓柱—上場門と下場門—天井—舞台の裝飾—廣和樓その他……………九二
 四、樂屋……………九六
 役者部屋—化粧場と劇神……………九六
 五、觀覽席……………九八
 包廂—池子—テーブルと腰掛……………九八
 六、附屬部屋……………一〇〇
 七、新式劇場……………一〇一
 八、劇場概評……………一〇二
 劇場と寫眞—苦痛と危險……………一〇二
 九、背景道具と衣裳……………一〇四
 粗末な背景—簡單な道具—各劇と道具—火彩—衣箱と盛頭箱—詳細目錄……………一〇四
 十、劇場の組織……………一一四

前台と後台—前後台の人員—劇場經營
 十一、劇と警察……………一一八
 戲園管理規則—戲班管理規則—税金
 第五 興行……………一二一
 一、興行主……………一二一
 二、劇場と俳優……………一二一
 名優と旅役者—劇場と俳優の相談—加錢—打炮三天
 三、興行と季節……………一二三
 四、演劇時間……………一二四
 五、毎日の幕數……………一二五
 六、俳優の登台……………一二六
 七、俳優の配當……………一二六
 八、藝題の排列……………一二七
 九、流行の芝居……………一二八

十、芝居の廣告……………一二九
 十一、戲單(番附)……………一三〇
 十二、觀客……………一三一
 十三、囃方……………一三二
 十四、觀劇料……………一三二
 席料—茶代と菓子代
 十五、座賣の横着……………一三三
 茶錢の請求—唯一の目的
 十六、祭日と休息……………一三五
 十七、催戲と十八番……………一三六
 得意の藝當—譚鑫培と梅蘭芳
 第六 開演……………一三八
 一、芝居の開演……………一三八
 二、舞台の實況……………一三九

三、樂屋の實況……………一四四
四、觀覽席の實況……………一四六
五、劇評と新聞……………一五〇

卷頭

支那風物研究會の趣旨
支那風物研究會の會則
插畫 (十一頁)



支那芝居の樂器

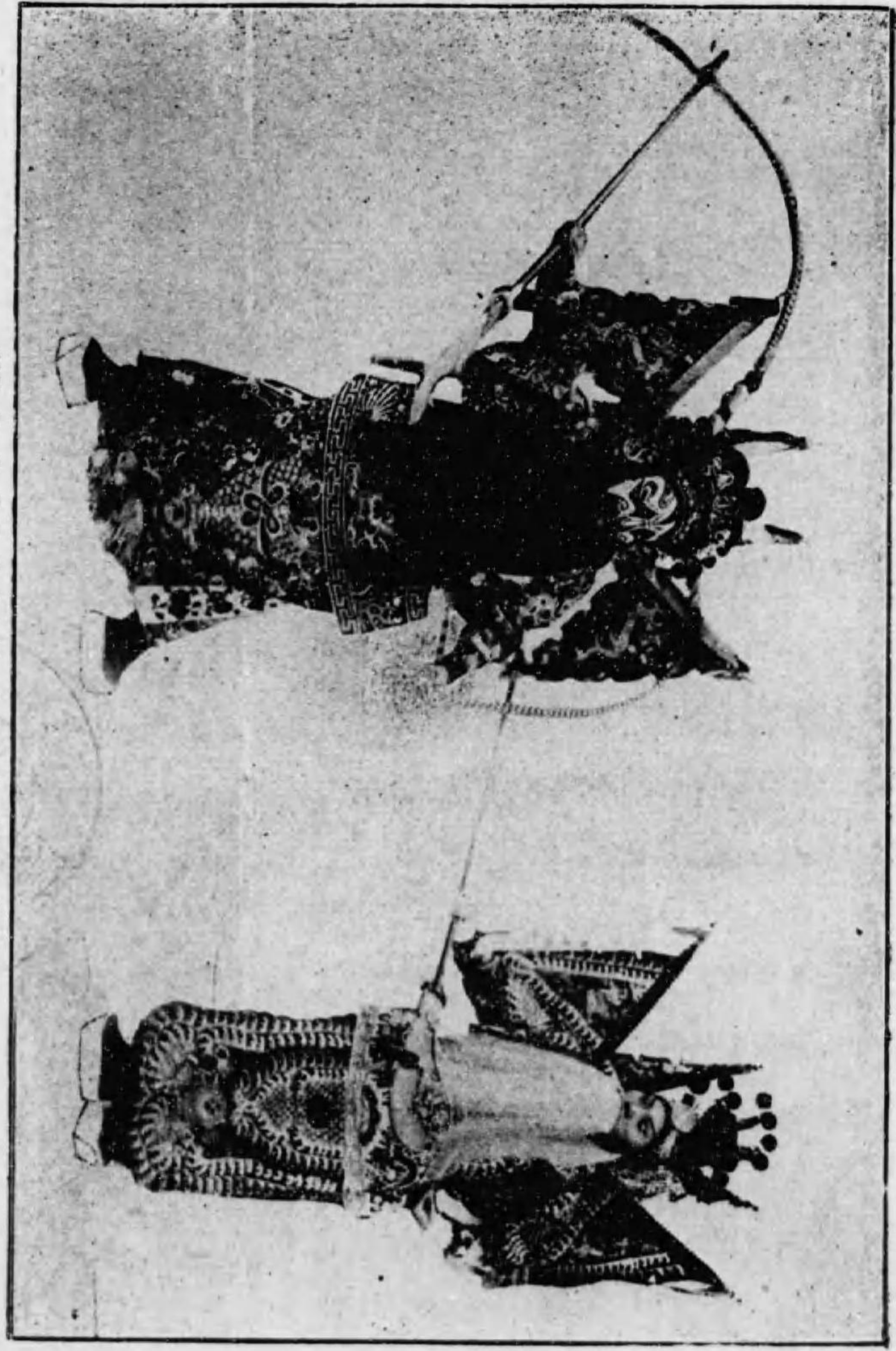
(二)畫略の藝種各居芝那支



(一)畫略の藝種各居芝那支



(三) 支那各稱靈の略畫



余叔岩金錢福の定軍山(右余左)



傳拂紅の秋艶程



鼓花打の風陣九



俠三壑風の丹社縁



母探那四の英富譚

關橋草の春永劉

珠頂慶の良連馬



村虎惡の來春李



會天安の基振郝

俳優の名刺



女優金少梅



余叔岩



小樓即楊小樓



侯喜麟即老三十旦



女優碧雲霞の狸猫換太子



女優李桂芬の四郎探母



女優琴雪芳の西裝



女優蓋榮萱の惡虎村



龍馬流車陸
離於陰鄧而
不以富貴驕
人必以謹
宣統紀元阜月

時慧書

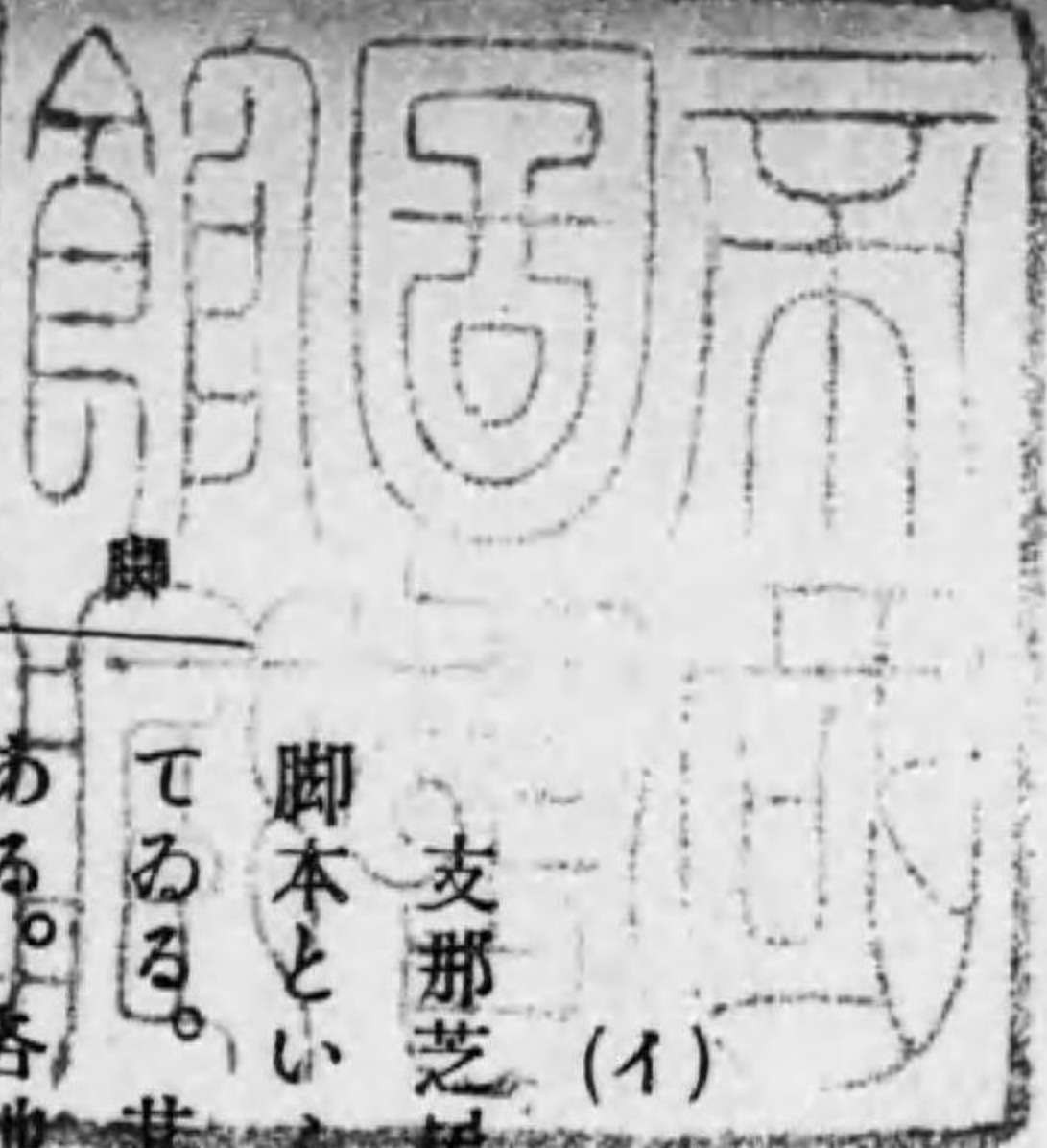
支那芝居 (下卷)

聽花 辻武雄 著

十三 脚本

(イ) 脚本の種類

支那芝居には、脚本は種々澤山ある、支那では、脚本のことを、俗に戯本子といひ、脚本といふのは、寧ろ文語である。今日では、脚本は、坊間にも、澤山に出版せられてゐる。其の脚本の数は、崑曲に關するものを除いても、少くも七八百種以上は確にある。各地の劇場で、普通に用ひられてゐるものばかりでも、三四百以上ある。又其の中で、彼方の劇場でも、此方の舞台でも、常に屢々演せらるゝ重なる脚本を數へても、確に一百種以上はある。そして前にもいつたやうに、其の脚本には、一幕物もあ



本

脚

れば、續きものもあり、其の劇の筋には、時代物もあり、世話物もあり、教訓的のものあり、戀愛的のものあり、諷刺的のものあり、武勇的のものあり、或は歡樂、或は悲嘆、或は神仙、或は滑稽といふやうに、種々様々に分れてゐる。坊間でも、近來は種々な印本やら、寫本を賣つてゐるのであるが、坊間のは、實際俳優が劇に用ふる台本とは、多少違つてゐる所があり、又俳優各自の台本にしても、各々少しづつ、違つて居つて、例へば、譚鑫培には、譚鑫培流の台本があり、孫菊仙には、亦孫菊仙流の台本があり、楊小樓には、楊小樓のがあり、郭寶臣には、郭寶臣のがあり、梅蘭芳には、亦梅蘭芳のがあるのである。

(ロ) 脚本の作者

脚本の作者は、崑曲に屬する分は、多くは有名な文人、學者の手に成つたもので、其の作者の名前も、大抵判つてゐるが、普通の芝居、即ち二黃や、西皮や、梆子に屬する脚本作者の名は、至つて判かりにくい。此等作者については、僕は、種々と探査

して見たけれども、ナカ／＼判からない。今日普通に行はれてゐる脚本は、すべて清朝の乾隆以後に出來たもので、殊に道光から同治にかけて出來たものが多く、其の脚本は、大牛少しばかり文字の判る老優等が、古い脚本（重に崑曲のもの）を焼き直したもので、その文學上の價値は、至つて少ない。いはゞ清朝の末葉には、純粹な脚本作者は、殆んど一人もゐないといつて差支ない。先づ故人としては、有名な程長庚や、余三勝や、楊月樓や、汪桂芬等が、脚本の著作に、多少關係あつた位、最近では、前年死んだ汪笑儂、梁巨川（此の人は一個の愛國的文人で固より俳優ではない）三麻子や、夏月珊など、僅々の人數に過ぎない。今日北京で脚本を新作してゐるのは、教育部の通俗教育研究會と、李準と、楊韻圃などが有名である。

(ハ) 脚本の出處

次に、脚本の出處、即ち粉本は、主として、稗史、小説、又は隨筆物、筆記物から出てゐて、其の書物は、三國誌や水滸傳を筆頭として、列國誌、今古奇觀、施公案、

包公案、楊家將、紅樓夢、綠牡丹、西遊記、七俠五義、精忠傳、濟公傳、飛龍傳、聊齋誌異などである。例へば、紅鸞禧や、下河南は、今古奇觀から出で、黃鶴樓や、失街亭は、三國誌から出で、搜孤救孤は、列國誌から出で、惡虎村や、落馬湖は、施公案から、奇冤報は、包公案から、雁門關や、演火棍は、楊家將から、晴雯擲扇は、紅樓夢から、嘉興府は、綠牡丹から、金錢豹や、安天會は、西遊記から、四杰村は、七俠五義から、八大錘や、岳家庄は、精忠傳から、趙家樓は、濟公傳から、胭脂判や、青梅は、聊齋誌異から、いづれも出てゐる。

(二) 時代と人物

其の脚本の種類は、既に前にもいつたやうに、或は劇の性質から、或は脚色の上から、或は音曲の上から、或は形狀の上から、種々に區別せらるゝのだが、其の劇に演ずる時代をいふと、春秋戰國から、前清時代まで、各時代を通じて、それ〴〵大抵存在して居り、其の中で、劇種の最も多いのは、戰國と、三國と、宋朝の三時代である。

左に各時代に關する藝題を、一ツ宛順を逐つて擧げよう。

商(摘星樓) 殷(太師回朝、反五關) 列國(魚腸劍) 秦(宇宙鋒起霸) 漢(昭君出塞) 三國(羣英會) 晉(桑園寄子九蓮灯) 隋(罵楊廣) 唐(貴妃醉酒) 五代(雅觀樓) 宋(四郎探母) 元(取金陵) 明(梅龍鎮) 清(惡虎村)

次に、支那脚本の中に現はるゝ人物をいふと、固より種々雜多で、英雄豪傑もあり、節婦義僕もあり、才子佳人もあり、奸賊もあり、惡徒もあり、其の中で、日本人によく知られてゐる人物だけを擧げて、戰國の田單や、伍子胥や、莊周や、三國の劉備や、孔明や、曹操や、趙雲や、司馬懿や、周瑜や、關羽や、張飛や、孫夫人や、唐の楊貴妃や、宋の宋江や、包拯や、明の嚴嵩等がある。

(ホ) 脚本の組織

それから、脚本の組織の大要をいふと、其の組織には、固より種々あるが、文劇では、正生と、老生と、大花臉と、正旦と、老旦と、花旦と、小生と、文丑とが、主要

人物となり、武劇では、武生と、武老生と、武旦、刀馬旦が、主要の地位を占め、時には、二花臉や、武丑（即ち開口跳）が、主要人物となることもある。

そして各脚本には、必ず正角と配角との役割があつて、正角とは、其の劇の第一の主人公で、最も重要な役柄であり、配角とは、即ち正角に對する對方（アヒカタ）で、謂はゞ、其の劇の第二主人公の役である。例へば、正角に、正生か、老生が居れば、配角には、必ず正旦か、大花臉が居り、正角に、花旦が居れば、配角には、必ず小生か、文丑が居り、又武生が正角なれば、必ず他の武生か、二花臉が、配角であり、又正旦が正角なれば、老旦か、老生が、配角であり、老旦が、正角なれば、必ず文丑か、老生が配角である。又正角といふのは、必ずしも一人に限らない。劇によりては、二人の正角があり、老生も、正角であれば、正旦も、正角であり、又正生も、正角であれば、大花臉も、正角であり、又花旦と小生、老生と正旦、何れも正角で、甲乙の無いものもある。其の外、詰らない役柄には、脚色の名の上に、掃邊とか零碎とか、謂はゞ日本劇での馬の脚のやうな名が附いてゐる。

(へ) 配合の人物

又日本の劇では、大抵男女を配合してあり、支那劇でも、其の多くは、矢張男女を含ませてあるが、全く男形ばかりで、女形は一人も加らない劇も多少ある。又文劇ならば、大抵滑稽役を勤むる文丑が加つて居り、又武劇ならば、大抵武丑、即ち開口跳といふ一種の武人が加つてゐる。それから、支那劇の仕組では、最初人物が、舞台に出て來ると、多くは、必ず一人々々、姓名を名乗つたり、出て來た由來を説明したりするが、餘程日本の能狂言の仕組みに似てゐるところがある。

(ト) 脚本の特色

そして、支那劇組織の一ツの特色であり、同時に亦一ツの缺點ともいふべきは、餘りに重きを第一の主人公に置き過ぎ、其の他の役割は、どうでも宜しいといふ様に、少しも重きを置かれないので、折角の名優の演ずる妙劇も、これが爲めに片落ちとな

り、劇の全局から見て、大に興味を殺ぐといふ遺憾があるやうに思はれる。

(チ) 脚本の台詞

次に脚本中にある台詞を、ザット説明すると、台詞は、前にも云つたやうに、其の言語に概して艶があり、普通の會話とは、餘程違つてゐる。左に其の二三の例を擧ぐると、三國誌劇の空城計といふので、孔明は、寡兵で西城を守つてゐる時、司馬懿が、兵を率ゐて城に近づいたと、注進があると、孔明は、

再探、暖呀、司馬懿人馬來得好快呀、今日才知、話不虛傳、令人可欽、令人可佩、吓、司馬懿人馬到來、大小軍官、吊出在外、難道我左手被摑、右手被縛不成、

と嘆息し、やがて孔明が、空城の妙計を案出すると曰く、

蒼天呀蒼天、我保漢室江山、就在此空城一計也、

又三娘教子といふ、節婦と義僕の精神を仕組んだ劇で、其の婦人が舞台に出ると、先づ一番に愁嘆して語る。

毎日織絹在機房、兒夫一命傷鎮江、多虧薛實搬尸轉、張劉二人起不良、奴家王氏春娥、配夫薛廣、因往鎮江貿易、不想傷命他鄉、多虧老薛實搬尸還鄉、可恨張劉二氏、見夫一死、另行改嫁、是奴在靈前、發下洪誓大願、永不改嫁、扶養前房一子、名叫倚哥、送在南學攻書、不在話下、看今日天氣晴和、不免去到機房織絹便了、正是雲霧不知天早晚、天吓、雪深那識路高低、

又翠屏山といつて、水滸傳の中から、仕組んだ劇で、一人の淫婦が、或る奸僧と、間男をしてゐるのを、其の夫から感づかれて詰責せられたるのに對し、彼の淫婦は、空呆けて曰く、

常言道的好、夫婦沒有隔夜之仇、總然有點不是、睡到晚半上、中間有個說和老人、滿天彩雲都散了、大爺你說的那裡去了、說的那裡去呢、

又蝴蝶盃といふ一種の艶物劇があるが、其の中で、或る公子が、某佳人に、情意を通ずると、佳人は語る。

公子要放尊重些、你是讀書之人、豈不知綱常大道之禮、你乃避父逃難之人、奴是含

冤受州之人、若作苟且之事、豈非禽獸乎、

又宇宙鋒といふ劇で、秦の趙高の女が、強ひて二世胡亥の后に納れられんとするのを拒み、故らに瘋癲を装ひ、胡亥を罵つて語る。

還要參王見駕麼、我曉得吓、皇帝老官、恭喜你的萬福、賀喜你的發財吓、阿他笑、我亦好笑阿、哈々々々々々々々你笑得我瘋癲、我笑得你無道的昏君阿、列位大人老哥哥、你也要聽了、他先君無道、東平大海、西連阿房、南修五嶺、北築萬里長城、我想這天下、乃人人之天下、未必你一人之天下、這江山、你家未必坐得長久（此の曲本は尙小雲の所藏に係る）

梅蘭芳の新作で有名な黛玉葬花で、林黛玉は、左のやうに自己を説明する。

奴家林黛玉、不幸父母双亡、外祖母史太君、將我接進京來、一同居住、倒也十分憐愛於我、但是寄人籬下、怎比自己家中、想起双親好不教人傷感、生來弱質、時時病不去身、更覺多添愁悶、這且不言、這數日天氣困人、春光日暮、東風肆虐、簾外花飛、或落塵埃、或委藩溷、好不似那紅顏薄命、睹景傷情、相憐同病、因在這花園東北角

上、起了一座葬花香塚、每到花落之時、便將花片收拾掩埋、也免得落紅無主、今日身體、尙是爽快、不免葬花一番、以消愁悶呵、紫鵲那裏、

此外、澤山あるけれども、之を畧するとして、其の言語に、餘程艶があり、文語の多く混つてゐることは、右の數例を見ても、直ぐに判かる。そして其の言ひ廻はし方が、普通の會話とは違つて、語尾を長く引き、重々しく、所謂芝居式である。けれども、其の中で、文丑の使ふ台詞は、殆んど皆北京語であつて、其の言ひ廻はしも、普通の談話と、餘りに違はないから、素人には、餘程判り易い。花旦の使ふ台詞にも、餘り芝居式でないところがある。

(リ) 崑劇の台詞

崑曲の昭君出塞（即ち王昭君が匈奴に赴くの劇）に、昭君が關門を出でんとして、馬が進まない時語る。

漫說道、人有思鄉之意、馬豈無戀國之心、何況人乎、就是馬到關前、馬到關前、他

步懶移、人影稀、人影稀、只見北雁南飛、冷颼々、朔風似箭、又只見曠野雲低、細雨霏々、在王宮、多錦綺、受洪福、與天齊、自幼在門閥之中、那曾受風霜勞役、又長生殿傳奇中の絮閣といふ一齣に、玄宗と楊貴妃との對話は、左の如く語る。

(玄宗)寡人の意中人、除了妃子、還有那個、(貴妃)妾那裏當得陛下意中人、陛下向來、寵愛梅精、何不宜召他到來、以慰聖情、(玄宗)此女久置東樓、那有復召之理、(貴妃)陛下休要瞞妾了、悄東君春心、偏向小梅梢、單只待望著梅來把渴消、既不沙、怎得那一斛珍珠、去慰寂寥、

又僕が平生最も愛讀する桃花扇傳奇の一節に、

(丑)相公不知、那熱鬧局、就是冷淡的根芽、爽快事、就是牽纏的技葉、倒不如把剩水殘山、孤臣孽子、講他幾句、大家滴些眼淚罷、

(小生)這是媚香樓了、你看寂々寥々、湘簾晝捲、想是香君、春眠未起、俺且不要喚他、慢々の上了粧樓、悄立帳邊、等他自己醒來、轉睛一看、認得出是小生、不知如何驚喜哩、

(又) 脚本の歌句

劇に歌ふ歌の文句は、屢々いふやうに、孰れも普通の言葉とは、違つてゐて、一定の規則があつて、言はゞ一種の詩歌であり、押韻は、普通の詩のやうに、嚴格ではないが、それでも、語路の上から云つて、餘程歌ひよく出来てゐる。而して其の一定の規則といふのは、二黄と、西皮の二劇に用ふる歌詞は、多くは、一句の中を、三字、三字、四字に分けてあり、梆子劇にも、それと一樣の歌詞はあるが、黄皮のやうに、嚴格でなく、九字一句のや、十字一句のものもある。又右の三劇を通じて、七字一句のものあり、これは一寸普通の七言絶句を見たやうなものである。又たとへ一句の字數が、畧ぼ定まつてはゐるが、場合に依つては、字數が足らなんだり、或は字餘りがすることも勿論ある。此の點からいふと、崑曲の歌詞は、流石に、文人學者の手に成つたもの、殊に曲牌といつて、歌の調子を嚴格に區別したものがあつて、其の牌名が、約四百内外もあつて、其の牌名によつて、字數や、句讀が定まつてゐて、非常に嚴格であ

る。左に二三の例を示さう。

▽鳳鳴關 (程長庚曲本抄)

師爺談話藐視人、細聽俺趙雲表一表功勳、在盤河曾救公孫命、只殺得那袁紹四路奔騰、大戰典韋賊投奔、先帝爺他借我大破過曹兵、在臥牛山前來歸順、我隨先帝進古城、長坂坡與曹兵大交一陣、在陣前失散了糜氏夫人、我左尋右找難查問、在難民之中、打聽得信音、豪傑馬上心不定、我遠遠聞聽有個婦人放悲聲、尋見夫人把罪請、他把幼主交付俺趙雲、我請夫人跨金鎧、他言到大將無馬怎能戰爭、左請右請實不允、那邊廂又聽得戰鼓咚咚俱是賊兵、夫人他投井尋自盡、某推墻掩井蓋過他的屍靈、看曹兵逼得緊、某只得身背幼主匹馬單槍、單人獨騎殺出千軍萬馬營、祭東風遇見了丁奉徐盛、他追趕師爺未到了江心、看々賊船追得近、某對準船蓬撒放雕翎、那時節師爺回帳傳一令、命我去取桂陽錦繡城、趙範他獻城禮恭敬、都只爲同姓結了昆倫、筵前他見我威風凜凜、願把他孀嫂與我配爲婚、當時聞言怒氣難忍、某就拳打賊子出了城、小周郎定計太毒狠、某也會保主東吳招過親、攔江奪主功勞盛、假途滅虢力退過吳兵、

綿竹關我曾戕蜀將性命、金雁橋我也曾箭射過張任、米倉山救黃忠衆賊四奔、陽平關單人獨騎破過曹兵、爲失荊州先帝恨、報冤仇、隨先帝前往戰爭、火燒連營遇陸遜、我也曾救主在萬馬營、白帝城曾受託孤的命、命我趙雲秉忠心、七擒孟獲我在陣、隨軍帥聽指揮破過苗人、大功勞一時表不盡、小小功勞也記不清、趙雲今才七十正、還比黃忠小幾春、爲國勤勞安能養靜、三軍笑我老無能、縱死黃泉雖無恨、有何面目見先君、此去倘若不得勝、願將自首掛營門、眼前與我一支令、要學那黃忠取定軍、

▽失街亭 (譚臣培曲本抄)

我本是、臥龍崗、散淡的人、憑陰陽、如反掌、保定乾坤、先帝爺、下南陽、御駕三請、算就了、漢家業、鼎立三分、官封到、武鄉侯、執掌帥印、東西戰、南北剿、博古通今、周文王、訪姜尙、周室大振、我諸葛、怎比得、前輩先生、閒無事、在敵樓、我亮一亮、琴音我面前缺乏箇知音的人、

▽碰碑 (同前)

金烏墜、玉兔升、黃昏時候、聆姣兒、不由人、珠淚双流、我的兒吓、七郎兒、回雁

門、搬兵取救、爲什麼、這時候、不見回頭、惟恐怕、潘仁美、暗下毒手、怕的是、小姣兒一命罷休、含悲淚、進大營、双眉愁皺、身寒冷、腹內飢、遍體廳々、

▽賣馬 (同前)

店主東、帶過了、黃鏢馬、不由得、秦叔寶、兩淚如麻、提起了、此馬來頭大、兵部堂黃大人、相贈與咱、遭不幸困只在天堂下、欠你的店飯錢、無奈何、只得來賣他、擺一擺手兒你就牽去了罷、但不知此馬就落與誰家、

▽南陽關 (同前)

恨楊廣、斬忠良、讒臣當道、嘆双親、不由人、珠淚双拋、手扶着朵口望下瞧、韓擒虎雖年邁煞氣高、尙師徒跨下呼雷豹、麻叔謀使長鎗鞭插在馬鞍橋、左右先行把帥保、層々的人馬圍住城壕、拈乾了淚痕伯父稟告、怪兒言來听根苗、自古道臣盡忠來子當盡孝、不枉人間走一遭、我的父忠心把國保、敲牙割舌爲的是那條、四員虎將俱已喪了、我那年邁的娘、也受那一刀、到此時就該把氣消了、氣困南陽爲的那條、蓋世忠良臣畫表、叫人淚拋不淚拋、

▽逍遙津 (孫菊仙曲本抄)

父子們、在宮中、傷心落淚、叫孤王、思想起、好不傷悲、曹孟德、與伏后、結下冤對、可憐他、被奸賊、把命來追、二皇兒、年紀小、孩童之輩、他不能、在靈前、奠酒三盃、恨奸賊、把孤王、牙根咬碎、上欺君、下壓臣、作事全非、欺寡人、在金殿、不敢回對、欺寡人、好一似、牆倒衆推、欺寡人、好一似、羊入虎威、欺寡人、好一似、犯人受罪、欺寡人、好一似、網打魚圍、欺寡人、好一似、鷹抓兔脇、欺寡人、好一似、貓鼠相隨、欺寡人、好一似、囚犯發配、欺寡人、好一似、孤雁難歸、欺寡人、好一似、失魂怨鬼、欺寡人、好一似、揚子江駕小舟風狂浪大波浪滔天危在旦夕我就無力挽回、欺寡人、好一似、殘兵敗隊、心又驚、肉又顫、却是何爲、

▽罵楊廣 (同前)

忽听金殿一聲詔、不由老夫怒眉稍、先王宴駕如海倒、萬里江山一旦拋、傳位理當大太保、奸王楊廣霸當朝、此番上殿老命不要了、捨死忘生在今朝、文帝爺、坐江山、皇恩浩蕩、滿朝中、文武臣、治國安邦、到如今、又出了、讒臣狗

黨、霸社稷、登九五、敗壞綱常、怒冲々、我且把、金殿闖、生合死、頃刻間、萬載名揚、

金殿之上把旨降、切齒叫罵無道昏王、一心只想社稷掌、意狠心毒賽虎狼、越思越想氣上撞、總然一死又何妨、怒氣不息公案上、手提羊毫寫幾行、

▽柴桑口 (孫菊仙曲本抄)

你是個、創業的、忠貞良將、你是個、震東方、豪傑賢良、誰似你、天生成、高志雅量、誰似你、文武畧、氣宇軒昂、誰似你、年弱冠、兵權獨掌、惟似你、定霸業、扶弱抑強、奸曹賊、統雄兵、如風似浪、只嚇得、衆兒郎、束手要降、若非你、懷大志、陳兵相抗、用機謀、殺的他、棄甲拋槍、到如今、稍得遂、太平景像、轉瞬間、天不佑、大厦斷樑、拋得我、故人兒、將誰倚幫、將誰倚、幫都督呀、拋得我、一人兒、誰作商量、

▽雍涼關 (孫菊仙曲本抄)

習玄機、學兵法、孫武一樣、識天機、曉地理、八卦陰陽、先帝爺、越潭溪、兇險波浪、

水鏡庄、遇高賢、述說衷腸、魏蜀吳、三分業、非容易掌、必須要、智謀人、扶保家邦、徐元直、荐山人、徐母命喪、蒙先帝、三顧我、出了龍崗、頭一功、白望坡、敵軍命喪、借東風、燒曹瞞、棄了荆襄、東吳臣、霸江東、寸土不讓、我三氣、周公瑾、搬屍柴桑、伐東吳、白帝城、龍歸海葬、曹受那、托孤恩、扶保朝綱、奉王命、征孟獲、七擒七放、奏凱歌、回朝綱、鞭敲鑼響、來至在瀘江、浪大風狂、慢首祭、享我才、過了瀘江、到如今、我中原、意外之想、司馬懿、掛了帥、枉費心腸、觀天星、看一看、魏國氣像、倘若是有兇險、項要隄防、

▽天女散花 (梅蘭芳曲本抄)

(賞花時)世出世開誰點化、開慢樓閣華嚴路幾叉、謝大慈指引向無遮、須不是因緣閒話、只爲那窮子未還家、詩衆生眠病見狂花、花發花殘病轉加、悟得華鬘非我相、不妨遊戲淨名家、(風吹荷葉然)天上華龍會罷、參遍世尊、走遍大千、俺也忙然、借得個居士寶、放根芽、抵得佈地黃金價、錦排場本是假、箭機鋒、俺自要莽靈山藤牽蔓掛、作踐了幾領袈裟、嘆只嘆、佛門病、醫無法、說甚麼彈指恒河沙數劫、一半是中宵火盡和

燈滅、說甚麼多生性海光明徹、一半是半渡風生無船接、俺這優曇種遍西方佛土供養師、任憑我三昧罷、遊戲毘耶、千般、生也、滅也、迷也、悟也、管他怎麼掙扎着了語言須差、

▽祭塔 (尙小雲曲本抄)

兒的父、許香愿、娘受熬油、恨法海、將娘的、機關猜透、斥他的、言和語、又用机謀、正梳粧、用寶鉢、將娘來扣、鎮守在、雷峰塔、不能出頭、娘好比、月當空、被烏雲遮透、娘好比、瓦上霜、日出方休、娘好比、弓斷弦、不能接救、娘好比、水東流、不能回頭、喜我兒、中狀元、占了魁首、願我兒、封妻、蔭子青史、名表在五鳳樓、

▽六月雪 (同前)

眼睜々、望蒼天、不能睜眼、爲什麼、六月雪、大雪滿天、莫不是、老天爺、睜開慧眼、他說我、寶娥女、死得可憐、魂靈兒、飛過了、九霄雲外、爲什麼、一霎時、又轉陽來、

▽擊掌 (同前)

手摸胸膛想一想、膝下還有什麼人、爺々若是喪了命、女兒披麻帶孝人、爺々若是喪

了命、女兒不來哭半聲、用手挖去兩眼鏡、父不信與女兒三擊掌、一霎時失却了父女情、對着上房忙跪定、

▽天水關

先帝爺、白帝城、龍歸海境、傳口詔、命老臣、長掛在心、命老臣、保陛下、江山從整、命老臣、把孫曹、定要掃平、臣上本、並非是、別得議論、望我主、准臣本、臣要發兵、

▽草橋關

衆皇兄賜我的錢行酒、大家同飲太平醕、長亭拜別我就拱一拱手、回朝參王在那五鳳樓、

▽白門樓

每日裏、閑無事、逍遙飲酒、到今日、稱心愿、得坐徐州、只恨的、曹操賊、屢次入寇、他那里、與人馬、來奪徐州、狗奸賊、蔡瑁我、怎能得夠、某若是、抖威風、羣賊命休、內侍臣、看過了、瓊漿美酒、我二人、只歡樂、多飲幾甌、

▽算糧登殿

狗賊人假意將我勸、王寶川心中不耐煩、我看你花枝招展頭上戴、紅々綠々身上穿、來來來隨我到簷下看、你看一看魏虎賊那個容顏、秤宅鼻子嘸兒眼、雅賽過古廟中一個判官、未曾走動大肚皮來挺、要賽東海岸一個老烏龜、我要嫁了一個真皇帝、我是不嫁那魏虎狗官、

(ル) 崑劇の歌詞

次 曲劇に用ふる歌詞を擧ぐると、

▽長生殿

萬里巡行、多少淒涼途路情、看雲山疊處、似我亂愁交並、無邊落木響秋聲、長空孤雁添悲哽、提起傷心事、淚如傾、回塗馬嵬坡下、不覺恨填膺、轟々旗旌、有殘日、風搖影、征鳥崎嶇怎暫停、只見黃砂散漫天昏暝、哀猿斷腸、子規啼血、奴叫人怕聽、兀的不慘殺人也麼哥、兀的不苦殺人也麼、蕭條怎生、娥帽山下少人經、冷雨斜風撲

面迎、

▽漁家樂

淚零々做了江干的花片、冷淒淒做了天邊的孤雁、哭哀々做了石砌中的亂蛩、虛飄了做了陌上的楊花倦、你是衰暮年、誰知飛災猶未免、如今早晚看誰人面面、好向月夜灘泣杜鵑、哀憐骨肉今番在各一天、難言弱質今番在那一天、

▽嫁妹

罷例着破傘孤燈、對着這平安吉慶、光燦爛劍吐寒星、伴書箱、隨綠綺、趁着這蹇驢兒跼蹐、俺這裏一椿々寫上丹青、是一幅梅花景、

▽琴挑

月明雲淡露華濃、欹枕愁聽四壁蛩、傷秋宋玉賦西風、落葉驚殘夢、閒步芳塵數落紅、又桃花扇の第一齣「聽稗」に、
孫楚樓邊、莫愁湖上、又添幾樹垂楊、偏是江山勝處、酒賣斜陽、勾引遊人醉賞、學金粉南朝模樣、暗思想、那些鶯顛燕狂關甚興亡、

又第廿三齣「寄扇」に

記得一霎時、嬌歌興掃、半夜裏濃兩情拋、從桃葉渡頭、尋向燕子磯邊、找亂雲山、
風高鴈杳、那知道梅開有信、人去越遙、凭欄凝眺、把盈々秋水酸風凍了、
とある。

(オ) 文學的價值

二黃、西皮、梆子、崑曲の四劇につき、其の脚本の詞句の上に於ける文學的價值を一口に評すると、流石に、有名な文人、學者の手に成つたものだけあつて、崑曲が第一に位し、第二は、黃皮の脚本で、最も劣悪なのは、梆子の脚本である。これは、崑曲のが、多く文人學者に依つて作られたのに反し、黃皮、梆子の脚本は、概ね俳優の中で、稍文字を解するものが、古い崑曲や、小説、稗史を見て、無造作に、之を作つたからである。又各脚本について、詳細に之を調ぶると、奇怪で理窟に合はないことや、前後矛盾することなどが、非常に多いのは、到底免かれざるところである。

(オ) 出場の人數

次に各劇に出場する役者の數は、固よりマチ／＼で、定まつてはゐない。主人公から、馬の脚、旗持ちに至るまでを計算すると、十人位のもあれば、二十人、又それ以上のものもあるが、その中で、最も多いのになると、或る武劇を演るときなどは、一幕を通ずると、百人以上にもなるが、只一段の即座だけに、一番多い時は、五十人も、六七十人も出ることがある。それが、あの廣くもない舞台の上を、右横左横に、駆け廻るのだが、よく見てゐると、混雜の中にも、チャンと、一定の法則があつて、少しも衝突もしないで、よく遣り除けるのは、感心の外はない。これに反し、人數の少いことになる、徹頭徹尾、只の一人で演るのがあつて、その芝居は、花子拾金といふのである。次に、二人しか出ないのには、十八扯といつて、姉と弟との兄弟劇と、武家坡といつて、夫婦劇、或は小放牛とか、紡棉花などがあり、三人ものには、三娘教子といつて、一人の嬌婦と、一人の老僕と、一人の子供で演るものや、遺翠花や、釣金龜な

どがある、概していふと、文戯には、人数が少く、武劇には多い。そして之を平均すると、文劇の嚴正派には、重なる役柄が、二三人から、四五人居り、玩笑派、即ち艶物には、二三人も居り、武劇には、通じて重なる役柄が、二三人から、四五人も居る。

(7) 一齣の時間

其の一齣を演ずる時間をいふと、最も短いのは、大約二十五分から、三十分、最も長いのは、二時間のもあり、三四時間のもあるが、普通に多く演ずるのは、大約四五十分から、長くて一時間内外位である。此の一幕に費す時間については、俳優が稽古する際に於て、畧ぼ時間が定まつてあるので、其の舞台で演ずる時も、殆んど十分の差がないのは、感心である。(各一幕の時間は後に掲ぐる)

(カ) 禁止されたる劇

清朝時代から、今日に至るまで、風俗に害ある淫劇として、政府から、興行を禁止

せられてゐるのは、大約左の劇々である。勿論此等の劇中には、嚴格に言ふと、必ずしも淫劇でないものもあるが、當局者の鑑定如何によるので、是非もない。

送灰麵、十二紅、打櫻桃、富春樓、畫春園、双釘計、拾玉鐲、賣胭脂、斗牛宮、遺翠花、海潮珠、也是齋、錯中錯、逆倫報、富貴圖、關王廟、貞女血、小上坟、青雲下書、賣身投靠、珍珠衫、双沙河、殺子報、陰陽河、送盒子、

十四 劇 目 (藝題)

支那では、芝居の藝題のことを、普通戲名兒とか、戲目といふが、其の名の附け方には、自ら一定の規則があつて、その字數は、三字とか、四字のが多い。例へば、空城計とか、黃鶴樓とか、武家坡とか、蝴蝶夢とか、辛安驛とか、いふやうなものは、すべて三字づゝであり、又三娘教子とか、桑園寄子とか、目蓮救母とか、徐母罵曹とか、いふやうなものは、すべて四字づゝである。又數は少ないが、二字のもあつて、例へば、請醫とか、殺狗とか、頂磚とか、遊廟とかいふのがある、この外、四字のや、

三字のを詰めて、二字だけ書いたり、或は意味に因つて、五字にも、七字にも伸ばしていふのもあるが、これ等は、例外である。

又崑曲と高腔の藝題は、二字のが多く、四字のもあるが、二黄や、西皮、梆子のやうに、三字のは多くない。例へば、二字のには、夜奔とか、負荆とか、拷擣とか、いふのがあり、四字のには、北饒胖姑とか、游园驚夢とか、いふのがある。又黄皮劇の藝題にしても、もと四字のを二字に縮めていふことがある。例へば、三娘教子を教子といひ、桑園寄子を寄子といひ、捉曹放操を捉放といひ、四郎探母を探母といふなどである。一口にいふと、皮黄や、梆子の藝題には、三字のが多く、崑曲のには二字のが多く、高腔のには、四字のが多い。

同じ劇にしても、藝題が種々に分かれてゐるのがある。例へば、文昭關といふのは本名であるが、其の別名には、子胥過關とか、一夜白鬚とか、楚將投吳とか、宿黎陽とかいひ、七星灯といふのは、本名であるが、その別名には、五丈原とか、孔明求壽とか、孔明觀星とかいひ、南天門といふのは、本名であるが、その別名には、走雪山

とか、廣華山とか、曹福登山とかいふ。

月下美人

汪笑儂

殘妝卸罷黃昏後。小步閑階趁月行。偶立東牆旋顧影。
 本來南國最多情。前身合住瓊樓冷。對面如窺寶鏡明。
 欲向嫦娥問消息。廣寒高處作麼生。

第三 俳優

一 俳優

支那で俳優といふのは、初めにもいつたやうに、戲子とか、唱戲的とか、或は班子ともいつて、全く一種専門の藝人に屬し、その外に、一種風流の道樂として、彼等戲子と、相位して居るものがある、それを俗に票友とも、清客串ともいふ。

(イ) 全國の俳優

全國の俳優の全數は、固より統計もなく、又確とした一定の標準がないから、果してどの位居るか、斷言することは出来ないが、その中で演劇の中心であり、又俳優の巢窟である、北京と上海とに就いて、概算して見ると、北京の戲子は、男女、子供を通じて、少くも二千五六百人以上は居るだらうし、上海にも、少くも千四五百人は居るだらうから、兩地のみの俳優にても、四五千内外に達する譯になる、それに北京の

近くでは、天津に三四百の戲子は居るし、又南の方では、廣東に澤山な戲子が居り、蘇州にも、南京にも、漢口にも、その他、南北各地の都會には、夫れ／＼、多少の戲子が居るので、これを限なく計算すると、大抵二萬以上の多數に達することは、餘り間違ひなからう。

(ロ) 俳優の出生地

俳優と、その出生地とに就き、今日の戲子に就いて、何省出生の者が、最も多いかと、一寸概算して見ると、北では直隸人と、準直隸人とが、最も多く、山西人、これに次ぎ、山東人も、幾分かある。南では、江蘇人と、安徽人が、最も多く、湖北人も多少ある。又廣東方面のは、主に純廣東人である。右に準直隸人といつたが、今日北京で有名な役者(一代出身を除く)の本籍を調べて見ると、純粹な北京人、若くは直隸人は、極めて少い。多くは安徽とか、江蘇とか、湖北とか、外省のものである。それは如何なる原因かといふに、例の清初の乾隆帝が、自分の道樂と、北京の繁華を謀るが爲め、

南巡の結果、態々右の各省から、有名な役者や、樂師等を、澤山に北京に呼び寄せ、厚く待遇して、大に演劇を奨励し、役者や、劇場を保護した所から、それ等の名優が遂に永住し、その子孫が、家業を繼續して、今日に及んだものである。その二三の例をいふと、前年死んだ譚鑫培や、現にゐる小小余三勝（余叔岩）は湖北人であり、程繼仙は、安徽人であり、楊小樓や、梅蘭芳や、時慧賢などは、皆な原籍は、江蘇人であり、有名な子供役者の吳鐵庵も、その先祖は、安徽から来たのである。純粹な北京人としては、子供役者の小王桂官や、故人としての名優張二奎や、大奎官位であらう。

二 俳優の出身

支那の俳優は、どんな方面から出て来るのであるか、これを大別すると、科班出身と、私家出身と、票友出身と、相公出身との四種になる。科班出身とは、昔からある少年俳優の養成所じ、子供の時から其處に入り、初めて、劇を學び、漸く成業して、

舞台上に登るもの。私家出身とは、俳優の自宅へ、その子供や、他の徒弟が、師匠に就いて、劇を學び、ダン／＼と舞台上に登るもの。票友出身とは、元來全くの素人で、芝居道樂から、或は覚え、或は教へられて、遂に舞台上に登るもの。相公出身とは、民國元年まで、北京に行はれてゐた、一種營業の男妓で、舞台上に登るものである。此の中では、科班出身の戲子が、最も多く、北京の俳優についていつたなら、全體の三分二以上は、この方面がら出てゐるので、今日の劇界に於て、男形にも、女形にも、有名なものが、ナカ／＼少くない。

三 科班の組織

科班の内容について遊ぶると、北京は、芝居の本元だけに、昔からの名優は、殆んど皆な北京生れか、子供の時、外から北京に來たものであり、従つて北京には、昔から科班兒といつて、子供役者の養成所があつたもので、民國以前には、大小幾つもの科班があつて、それ／＼役者を養成してゐた。處が共和以來、いろ／＼の關係から、

科班は、次第に解散してつて、四五年前には、富連成社といふ唯一の科班が存在してゐるばかりだつたが、やがて、崇雅社といふ女優養成所が出来、その後又斌慶社といふ子供役者養成所が出来たので、今日では、科班兒が、丁度三ツあるわけである。ところで、崇雅社と、斌慶社とは、まだ成立の時日が浅いので、内部の組織や學生の取締規則など、まだ立派に出来てゐないので、取り立て、いふ程のこともないが、富連成社の方は、成立已に十五年を経過して居るし、資本も富裕で、内部の組織や、學生への教授や、その取締規則なども、割合に整頓して居るので、その基礎が他の二ツの科班よりか、非常に鞏固である。これから、富連成社を第一とし、それに斌慶社や、女優養成の崇雅社を参照して、科班兒の組織や、學生の入社手續や、學生の年齢や、種類や、學生の分科や、芝居の教授法や、社内の取締や、起居飲食や、芝居小屋との關係や、卒業後の状態などを、ザツト説明しようと思ふ。

(イ) 科班の組織者

科班兒は、頗る専門的だけに、普通の人では、これを組織することは、到底出来ない。又資本家といつても普通の人では、トテも遣り切れない。それで科班兒を組織する人は、必ず役者出身の有力者であつて、又その資本家も、芝居も好きだし、半分は道樂的に、資本を融通するのである。現に富連成の社長葉春善も、崇雅社の田際雲も、斌慶社の俞振庭も、何れも劇界の有力者で、又富連成の資本家沈氏は、安定門外の外館(地名)での屈指の富豪、而かも大の芝居好きで豪膽もの、崇雅社と、斌慶社とは、定まつた一人の資本家はゐないが、いろ／＼と工夫して、資本を引き出してゐる。さて社長と資本家が定まつた所で、最初の出資は、どの位か、るかと概算して見ると、少くも、二萬元や、三萬元内外は要する、それで、先づ一定の家屋を求め、社内設備をする。一通りの芝居衣裳や、道具類を買ひ入る。それから、各科の教授に適當なる教師を雇入る。その教師は、素とより役者出身だが、中には、今日尙ほ舞台に登つてゐるものもある。けれども、その教師となるものには、多くは今日では登場しない人物で、評判高いといふよりは、寧ろ芝居に關するいろ／＼な技術や、故實や、

雑多の事柄に明るい方がよい。

その各教師には、夫々一定の俸給があるが、その額は、普通月に二三十元位で、その代りに、教師は、多くは常に社内に住み、(家族は携帯せず) 飲食は、總て社より支給し、又芝居小屋よりの収入や、堂會戲(大宴會に招かれて演る芝居)からの収入などの中より、幾分づゝ利益を配當せらるゝことになつてゐる。

(ロ) 學生の入社手續

科班兒の子供のことを、本來は、徒弟といふが、今日では、普通に、學生といつてゐる。その入社の手續は、ナカ／＼嚴格で六ヶ敷い。先づ一人の子供を社に入れようとするには、手蔓を求めて、社長にその意を通ずる。社長がこれを承諾すると(承諾しないのも勿論ある)契約書をその子供の家長から社長に納める。その契約書には、家長の外に、二人の有力なる保證人を要する。そしてその契約文は、一定の様式があつて、子供の乳名から、年齢、そして社長を師傅と仰ぎ、年限は、普通六ヶ年で、外

に卒業後一年の奉公、それから、子供の在社中は、衣服から飲食、總て社の負担(勿論相當の家庭あるものは股引とか、襦衣とか、靴とか、日用の小さい雜品は、時々家庭から子供に仕送る)である。

又その文中には、在社中は、總ての事、絶對的に師傅の命令を奉すること、たとへ病氣に罹つたり、芝居稽古のために、身體を傷ふたりしても、その家長は、一切苦情を言はざること、又萬一學生が社を逃走するときは、保證人より速に捜し出すこと、又都合によつて、退社の場合は、在社中の一切の費用を、家長や保證人から辨償することなど、それは、非常な嚴格な約束が記入せられてある。そして入社の際には、相當の家庭あるものは、大抵料理屋に、宴會を開き、社長や、教員や、保證人を招いて、馳走し、その席で、右の契約書を認め、社長に渡す。又愈々入學の際は、蒲團類は、自分に携帯し、社内の神前に於て、嚴格な儀式がある。

(ハ) 學生の年齢と儀式

科班に入る學生の年齢は、固より一定してゐないが、最も幼ないのが、八九歳から十二三歳位が多く、十五六歳以上のは、至つて少ない。だから、卒業する頃は、若くて、十五六七歳で、普通は、十八九歳である。稀には、十五六歳で始めて入社し二十歳まで卒業しないのもあれば、能力が悪くて、卒業が六ツケ敷く、晩くまで在社するものもある。又既に外で相當の技藝を覚え、途中から入社するものもあるが、それ等は特別に三四年で卒業させられる。その子供の種類には、いろいろあるが、多くは役者の家の子供で、現に故譚鑫培の孫譚富英や、梅蘭芳の胡弓弾きである茹萊卿の孫茹富蘭だの、尙小雲の弟尙富霞だの、天津の名優程永龍の息子程富雲などは、みな富連成社に入つてゐる。だがその子供の大半は、貧家のもの、或や孤兒の類で、衣食に窮した結果、芝居でも覚えさせて、將來の糊口に、便しようとするのである。又子供の中には、買ったものや、拾つたものや、或は曰く附きの怪しいものも混つてゐる。

(二) 學生の分科

學生が初めて入社すると、その四五日の中に、役者として習ふべき役柄、即ち部門が定まる。(この部門に就いては、全く社長の全權で、家庭よりの注文は、絶対に許さない規則である。)それで、それ等の子供をば、社長を始め、教員等が、各々子供の容貌やら、體格やら、咽喉やら、性質やら、各種の點から研究して、先づ文劇の方か、武劇の方か、男形にするか、女形にするか、を定め、その中で、又老生にするか、武生にするか、花臉にするか、青衣にするか、花旦にするか、或は老旦にするか、又は道化役の小花臉にするかを定め、それごとく、その道の教師から、次第にその藝を教えらるゝのである。この分科といふことは、子供の將來には、非常に關係のあることで、若しその定められた役柄が、果して、その子供に適當したならば、至極結構であるが、若し間違はれて、適當しない役柄に定められたときは、子供のためには、非常に不幸である。ところが、流石は、その道の達人、社長を始め、各教員とも、その點は非常に明達だけあつて、ナカ／＼間違はない。十人のうちで、九人までは、適當に選擇せられ、稀には間違ふことがあるが、そのときは、後から別科に移すことになつてゐる。

又たとへ一専門的に分科せられてはゐるが、演劇の道からいつて、總ての點を心掛けてゐなければならない所から、たとへ土台は、専門の一科になつてゐても、その外に、似寄つた他の役柄を教えらるゝことがある。

(ホ) 學生の名前

學生が入社すると同時に、學名(學生としての名前)が附けられる。その附け方は一定の規則があつて、主に社名の一字を採つて附くる。例へば、富連成社でいふと、第一期の學生は、その頃、喜連成といつた所から、總て喜の字が附いてゐて、康喜壽とか、侯喜瑞とか、閻喜林とかいひ、第二期の學生は、總て連の字を用ひ、何連濤とか、于連泉(即ち小翠花の學名)とかいひ、第三期の學生は、總て富の字を用ひ、沈富貴とか、茹富蘭とか、韓富信とかいひ、斌慶社についていふと、主に斌の字を用ひ、王斌芬とか、于斌安とか、耿斌福よかいつてゐる。けれども、女優養成の崇雅社では、總て普通の藝名を附け、社名の字を採つてゐない。だが各科班の内部で、教師が子供

を呼んだり、又は學生同志が呼び合ふときは、多くは、學名を呼ばないで、乳名を用ひてゐる。

(ヘ) 芝居の教授法

學生が入社すると、間もなく芝居の稽古に取り懸る。その教授方は、大體、歌曲と台詞と、所作と、武藝の四大門に分れてゐて、先づ最初には、文劇の方面に向ふ學生に對しては、主に咽喉の使ひ方、聲の出し方を馴らし、武劇に向ふ學生に對しては、主に身體の馴らし、手足の使ひ方を練習さす。そしてその咽喉を養ふ方法としては、社内に於ても、いろいろの仕方があるが、殊に一年を通じて、毎朝早く廣い野原に引き出し、例へば、前門外の天壇附近とか、順治門外の城壁に沿うた河岸などに連れて行つて、いろいろな法によつて聲を出させる。又身體を馴らすことについては、社内で、いろいろと工夫して、棒を使はせたり、いろいろな宙返りなどをさせる。そして各劇の一節々を、部門的に教へらるゝ前には、必ず教師から、その一幕の劇につき、

筋の大體を讀し聞かされる。

又前にいつた四大門の各藝を教授するについては、個人教授から、團體教授になり、最初は各々専門の教師があつて、各人各別に教ゆるのだが、其の教授時間に、社に往つて覗いて見ると、ナカ／＼に面白い。あの部屋には、胡弓に合せて、聲高らかに歌つてゐる者もあれば、此方にはいろ／＼激しく立ち廻つて居り、東に宙返りをしてゐるのが居ると、西には棒を振り廻し、棒を横へたのにブラ下がつてゐる者もゐて、それは／＼、實に騒はがしくもあり、面白くもある。又或る一室には、教師から授けられた、芝居の中の二三の文句を寫した紙片を大事に守つて、一字々々、熱心に暗誦してゐるのもあれば、彼處の隅には、花旦が附くる小脚を纏つて、ヒヨロ／＼歩いて馴らしてゐるものもある。又大體の芝居の筋や、歌や、台詞や、所作を覺えると、一幕づゝの役割に當る學生を、廣庭に組み合はせて、教師が付き添うて、其の場合を練習してゐるものもある。

此等の藝を教授するときは、非常に嚴格で、學生は少しも油断することを容されず、

一生懸命になつて、一々稽古に力めてゐる。若し少しでも間違つたり、文句を忘れたりすると、それは大變、立ろに掌を打たれたり、又は二定の體罰が、その輕重に従つて科せらるゝ。處が子供の腦力は、非常に敏捷で、記憶がよいので、特別に愚鈍の者の外は、よく覚えて間違つたり、忘れたりすることは、至つて少い。又衣裳の着方や、帽子や、靴の付け方、又化粧、隈取の仕方は、大體は教師から教えらるゝのだが、大抵は、芝居小屋に毎日連れられて行くので、自然に見覺ゆる。

(ト) 社内の取締

學生の社内に於ける取締り法は、極めて嚴格である。トテも門外漢の想像の及ばない程である。子供が子供丈けに、(即ち多くは貧乏人や、親なし、家なしの無教育の育ち)嚴格でなければ、到底遣り切れない。同時に、芝居に關する教育を施すことが出來ない。その取締規則は、各社何れも設けられてあるが、その中で、一番嚴格で、整頓して居るのは、富連社成である。社に行くと、或る二室に取締りに關することや、

芝居稽古に關するいろ／＼な規則が、筆太く堂々と書かれて、大きな額面にして高く掲げられてある。初入學の學生は、先づ一番に、その額前に立たせられて。その規則の大意を、社長や、教師から讀み聞かされ、學生は、それに對して、必ず嚴守すべきを誓はされる。

即ちその規則といふのは、先づ第一番に、自分は必ず、役者を以て營業とする。第一には、必ず社長や、教員の命令を絶対に遵奉して、熱心に芝居を稽古する。それから、社内に在つては、社外の人とは、一切交際はせぬ。社内の學生とは、親密にして決して喧嘩口論などをしない。又酒煙草は、固より嚴禁、又は遊戯をしたり、賭博などは、決してしない。そしてその技藝に關しては、自分のに就いては、固より一心になつて稽古するのは勿論、他の學生の稽古に就いても、成るべく熱心に注意して、自分の参考とすること、その外、いろ／＼な條件が、定められてあつて、學生のためには、非常に嚴格である。だから最初の中は、學生等は、随分苦痛を感ずるやうだが、暫くすると、自然に規則に馴れて來て、餘りに苦痛でないやうになる。又その規則の

中には、獨技藝の稽古ばかりでなく、將來舞台に出るからの注意や、樂屋に於ける、いろ／＼な規則や、注意方なども示されてある。

(チ) 學生と文字

學生の大半は、貧乏人の小供が多く、たとへ貧乏でなくとも、役者の子供とか、又は學校教育を受けない子供が多いのだから、その文字に關する程度をいふと、至つて欠乏してゐる。一口にいふと、眼に一丁字なしといつてもよい程である。例へば、百人の子供があるとして、その中で、尋常小學卒業程度のもものは、僅々十人には足りない、稀には、高等小學程度のももあるが、その大半は、一二三の數字さへ殆んど判らない程である。これについて、世間の識者からは、常に普通の教育を授くるがよいといふ議論があるが、先生達の教育程度が、尋常小學校位のも少い程だから、此の議論は今日に於ては、到底實行は不可能である。

そんな風であるから、芝居を教ふるについて、文字の力を藉りて、一一之を教ふる

といふことは、非常に困難である所から、その大體は、全く記憶力に訴へ、眼から入れないで、耳から暗誦的に注入せられ、學生の中で、幾分文字の力のあるものが、中にあつて脚本の中の文句を教へたり、教師の話しの足りない所をば補つたりする。それだから、たとへ六七年の修業を積んで、獨立的に舞台に登ること、なつても、芝居の筋や、歌の文句や、台詞やは、上手にやつて除けても、それはホンの暗誦的であつて、眞實に、その文句の意味を理解してゐるものは、あまり多くない。

(リ) 學生の起居

科班兒の門制は、子供養成のは、全く女禁制であつて、女優養成のは、之と正反對に、全く男禁制である。それで一口にいふと、富連成社と、斌慶社は、禪寺であつて、崇雅社は、尼寺である。その起臥の時間は、各社何れも、一定の規則があつて、大抵朝は六七時に起き、夜は十時から十一時に寝る。その學生等は、各々一定の住室があつて、普通分科(例へば文と武、男役と女役)と、年齢に應じ、同室に寝ることに定ま

つてゐるが、大抵一室に、坑の上に三四人か、四五人づゝ、枕を並べて寝る。その各室には何れも、一人づゝの監督者が附いてゐる。

學生は、大抵毎日芝居小屋に出掛けるのだが、晝芝居のは、午前十時半から、十一時頃より社を出て、小屋に行き、その學生が、芝居を演つて了ふ毎に、人數を集めて、幾隊にも分けて、次第に歸社する。勿論その往復には、一定の監督者が附いてゐて、規律を守らせ、途中で外人と談話するなどは、絶対に禁止せられてゐる。夜の興行になると、夕方から勢揃ひして、小屋に行き、芝居の済む毎に、前の通りにして歸社する。その在社の間は、晝でも、夜でも、課業があつて、少しも遊ぶ暇はない。夜は翌日の芝居を必ず稽古する。

前にもいつたやうに、學生の取締は、非常に嚴重であつて、一切外出を許されない、一切來客に遇はされない。たとへ家族や、親類の者が訪ねて往つても、只一寸門房で面會が出来るばかりで、それも永い時間は許されない。自分の寢室を參觀するなどは、勿論絶対に不可能である。又子供が自宅に歸るなどは、非常に困難である。勿論病氣

にでも罹つたり、或は重大な事故でもあつたら、家長の申出か、保證人の立會によつて、期日を定め、一寸歸宅することは出来るが、それ等でも、社の規則としては、あまり好まれない。社の規則として、自由に歸宅を許されるのは。驚くなかれ、一年中で年の暮れの僅々二三日か、四五日で、而かも大晦日には、必ず歸社せねばならない。(これは元日は芝居の大當日であるから)學生の寢起きする室内は、至つて不潔であつて、塵や埃りが、紛々としてゐる。今日の科班兒は、大分改良せられて、清潔だが、それでも到底お話にならない。入浴は、大抵冬は一週間か、十日位に、一回づゝ監督者に連れられて、四五人づゝ入浴に行く。夏は湯屋にも行くが、社内で拭ふことが多い。

(又) 學生の食事

學生の食事は、一日に二度である。朝は大抵八時か九時に、朝稽古が済んでから食べるのだが、大抵一碗づゝの當飼ひ麵である。その麵は、普通のウドン見たやうなの

で、分量は、普通半斤位であつて、その中の菜は、僅に小切れの肉が少しと、白菜が混つてゐるばかりである。夕方は、大抵米飯で、大概大きな碗に一杯づゝであつて、副菜としては、豆腐か、白菜か、モヤシに、少しばかりの肉の切れが入つてゐるだけである。その肉は、多くは羊肉であつて、豚肉はあまり喰べさせられない。それは豚肉は、あまりに油濃くて、咽喉の養生に悪いからである。こんな風に、粗末な食事で、最初の中は、子供によつては、分量に不足があるので、相當の家庭あるものは、時々宅から菜を造つたり、買つたりして、送り届けて来るし、又少しでも、小遣錢のある子供は、自分で社の賭方に、錢を遣つて菜を造らせ、自分と一所に食べる他の學生と共に食する。又一碗の麵や、米飯で不足するときは、自分でボーイに頼んで、焼餅や、焼芋を買はせたりして喰ふ。又子供でもあり、社での稽古が常にあるので、空腹になり易いが、空腹になつたからとて、あまりに買喰ひすると、咽喉や、胃腸に障害を生ずる恐れがあるので、社則としては、成るべく買喰ひをさせないで、次第に習慣を付けるやうに注意してゐる。

(ル) 學生と健康

學生の健康は、どちらがといふと、概して健康である。それは學生の大半が、貧乏の子供で、家庭にゐるときから、粗食に馴れてゐるので、たとへ社に入つてから、一碗の麵や、米飯に制限されても、格別に苦痛を感じない。同時に、殆んど、朝の起きるから、夜の寝るまで、打ち通しに、身體を使ふので、病氣に罹らないどころか、却つて家庭にゐた時よりか、健康が増して、肉付きもよくなるものが多い。それで科班兒に關係してゐる醫者の話によつても、彼等學生は、普通の子供に比して、その健康は、決して劣らない。その腕力は、普通の子供よりは、非常に強いといつてゐる。けれども、室内が不潔で、一所に枕を並べて寝たり、同じ洗臉盆で顔を洗ふのが多いので、自發的に、或は傳染して、トラホームに罹るものが、非常に多く、又一人か二人か、何か流行病に罹ると、その傳染は、非帶に速かで、盛んである。

(オ) 學生と劇場との關係

科班兒の學生は、大抵一定の芝居小屋があつて、未卒業のものは勿論、卒業したのも、その大半は、その小屋に、毎日行つて、芝居を演る。芝居小屋は、學生に取つては、一種の練習場である。この芝居小屋と科班兒との關係は、科班兒の方は、樂屋方面、即ち役者や、役者の衣裳、道具から、毎日の藝題を定むることを負担し、芝居小屋と契約して、一ヶ月に何程と、一定の金額を受くること、なつてゐる。そして卒業生に對しては、毎日一定の給料を給するが、(芝居を演つても演らぬでも)まだ卒業しない現在の學生に對しては、給料は遣らない。その代りには學生が舞台に出るやうになると、その技藝と評判の如何によつて、毎日一定の點心錢(菓子代)を給する。その點心錢は、數等に分れてゐて、最も少きは、一二錢から、一番多くて、八錢から十錢位だが、その中で、八九錢を貰ふ者は、至つて稀で、二三錢から、四五錢の者が多い。そしてこの點心錢は、僅々のものではあるが、科班兒の學生に取つては、非常に權威のあるもので、一文でも増されると、大層名譽であり、又藝が悪くなつたり、何か少しでも不都合なことでもあると、すぐに金額を減らさるゝ、そして此の點心錢

を定めるについては、社長と教師と、協議の上、精密に銜衡して、初めて定めらる、もので、ナカ／＼嚴肅なものである。又貧乏の子供が多いので、二三文や、四五文の小錢でも、彼等の爲めには、非常に有難味がある。卒業後の學生に對しても、この點心錢は、毎日の給料の以外に、矢張給せらるゝが、普通十文内外である。

(7) 卒業後の狀況

科班卒業後の學生の狀況は、固よりいろ／＼に分るゝ。今日の科班中で、崇雅社と斌慶社とは、創立がまだ淺いので、卒業生を出さないが、富連成社では、第一期生と、第二期生とは、已にすべて卒業してゐる。その卒業生の模様を調べて見ると、矢張科班との一定の芝居小屋に止まつてゐて、未卒業の學生と、一緒に芝居を演るのが多く、或はあまり舞台には出ないで、科班にゐて、助教授をしてゐる者もある。そして全く科班を離れて、獨立的に芝居を演る者もあるが、それはあまり多くない。又一定の芝居小屋に止まつてゐる卒業生に對しては、卒業後、早く一週間、遅くも二三週間經

つと、一定の給料が定めらるゝが、その料額は固より技藝と評判によつて、異つてゐて、先づ最初は、多くて、一日四五十錢から、少いのは二十錢位である。この給料は、普通の劇場に出ると較ぶると、甚だ少いが、これは一つは、義務奉公の意味もあり、又一ツには、芝居衣裳を持たないでも、芝居が演らるゝから、貧乏の學生に取つては、寧ろ便利なことである。

勿論卒業すると、彼等は、直ぐに自宅に歸り、全く自由の身となり、毎日宅から小屋に行くのだが、熱心なものは、大抵夜か、朝早くは、絶えず科班に行つて、練習を力むる。科班を離れて、獨立に營業する者には、いろ／＼な事情があるが、普通は、毎日の給料があまり少いのに、不平を鳴らし、増給を請求しても容れられないので、遂には獨立する者が多く、或は外に最負の客があつて、衣裳を造つて遣るし、他の劇場に運動して、舞台に出させ、科班には體よく話して、關係を斷つものもあるし、或は他の役者仲間から、いろ／＼と煽動されて、科班兒を離れるものもある。概していふと、科班出身の役者は、長い間、嚴肅な教育を受ける丈けあつて、技藝は、割合に

よく出来、殊に武劇の方面に於ては、他の場所から出る役者に比して、確かに數等優つてゐる所がある。ところで、何事でも拔群になるのは、困難であるやうに、科班出身の役者は、却々數多いけれども、技藝と名譽と相並んで評判のよいのは、非常に少ないものである。又科班を卒業する頃が、丁度聲變りの時機に際するのが多いので、卒業後になつて、聲變りの爲め、一時評判の劣へる者もあるし、又放蕩に身を墮して、遂に劇界から消滅して了ふものもある。

四 俳優の名

俳優の名には、種々あるが、大抵は、三字か、四字かである。そして固より門閥とか、家柄とかもあるが、日本の俳優の名のやうに、第十代市川團十郎といふやうな世襲的なのは全くない。

(イ) 昔と今

そして其の名の付け方は、昔と今とは、一寸異つたことがある。昔の附名は、大抵一種の藝名があつて、自分の姓や、號などは、至つて少なかつた。例へば、十三且とか、達子紅とか、元々紅とか、小叫天とか、いふやうなのが多く、この外に、單に子供名とか、綽名などを用ひたものである。然るに、近來では、大半は、姓と號とを用ふるのが多く、例の譚鑫培の如きも、もとは、小叫天といつたものだが、末年には、改めて譚鑫培（譚は姓で鑫培は號である）といひ、梆子劇の名優であるも郭寶臣も、もとは元々紅といひ、薛固久も、もとは十二紅と名乗つてゐた。

(ロ) 小の字花の字

この外に、役者の名前の上に、小の字か、一字か、二字喰附いてゐるのがあつて、例へば、小百歳とか、小八歳紅とか、小小余三勝とか、いふのがあるが、これは、その以前に、同じ名で、有名な役者がゐたのに因んで、それを眞似て、上に小の字を喰附けたのである。その中で、右の小小余三勝は、もと名優の家柄で、その祖父を、余三

月といつたのから、その子の名を小余三勝といひ、今日のは、その孫に當るところから、小の字を二ツ重ねてゐるのである。又今日でも、花の字の附いてゐるのがよくある。例へば、水仙花とか、牡丹花とか、海棠花とか、小梨花とか、小桂花とかいふのがあるが、これ等は、總て女形を勤むる役者である。

(ハ) 處と紅

又票友出身の名は、初めは、大抵姓の下に、處の字を用ひ、孫處（即ち孫菊仙）とか、龔處（即ち龔雲甫）とかいつたもので、この處といふ字は、處士といふ意味ださうな。又梆子劇の老生には、もとは大抵下に紅の字があつたもので、即ち達子紅とか、元々紅とか、十二紅とか、十三紅とかいふのがあり、彼等は、總て老生を勤めた役者である。

五 俳優の等級

(イ) 役柄と俸給

支那俳優の等級は、概していふと、矢張北京のが、聲價最も高く、上海のが之に次

ぎ、それから、天津、漢口といふやうになるが、其の役柄（支那でいふ脚色）から、等級を論ずると、正生老生が第一で、青衣が第二、武生が第三、大花臉が第四、といふやうな順序になり、花旦とか、小生とか、老旦とかいふのは、それよりか、下になる。だから、役者の給料を調べて見ると、一番高いのは、正生を扮するもので、從つて名譽も大である。今日でも、故譚鑫培とか、孫菊仙とかは、誰でも知らないものではなく、又ズット故人である程長庚とか、汪桂芬とかは、今に尙ほ聲名が高いが、いづれも正生を扮した役者である。

勿論花旦でも、老旦でも、小生でも、非常な尤物であり、其の技藝が神に入つたものは、名譽も高く、給料も多く取れ、結局實力の問題に歸するのだが、これは例外であつて、普通の場合は、前にいつたやうな順序になる。

(ロ) 男女と子供

又男優と、女優と、子供役者について、其の聲價如何をいふと、これも固より實力問題によるので、一概には言へないが、今日では、矢張男優が第一で、北方では、子供役者の方が、却つて女優よりも評判よく、南方、殊に上海あたりでは、女優が大に持て囃され、子供役者は、其の下風に立つてゐるやうである。

六 子供役者

子供役者といつても、支那では、決して馬鹿にならない。馬鹿どころではない、支那劇上では、子供役者は、大人の役者と、殆んど對等の地位を占めて居る。日本では、子供役者は、子役になるとか、別に子供芝居といつて、一種の雛形芝居を見たもの、やうに、遇せられてゐるが、支那では、決してさうでない。子供役者でも、容貌が優れ、聲が好く、藝が上手であれば、その聲譽は、實に非常なもので、従つて各劇場からも、引張り風になせられ、収入も、ナカ／＼に多い。

近年の子供役者としては、南北を通じて、誰も先づ指を吳鐵巷に屈するのだが、彼

は、七八歳の時から、舞台に出で、評判高く、今年漸く十八になるのだけれど、その技術の點からいつても、決して大人役者に劣らない。その収入も、安い北京でさへ、劇場での一幕五六十元から、百元内外は取れるし、天津や、上海に行くと、一箇月に少くも二三千元は安々と取れる。

七 俳優の給料

役者の給料は、固より一定しない。月極めもあり、日極めもあり、上り高計算もあり、観客極め(一人につき若干)もあり、又南北各地によつて、高低不同であるが、概していふと、今日では、最高額が、一幕二三百元、一個月四五千元から、七八千元であり、それから、一幕四五十元から、二三十元、十元、七八元のもあり、又月極めにして、二三千元から、千元内外、七八百元、四五百元になり、下等の役者になると、一幕演つて一二元から、八九十銭しか取れない。旗持の役を勤むるものは、一日詰切り、非常に多忙でありながら、其の給料は、僅に四五十銭から、二十銭内外である。

子供役者で、年齢からいふと、僅に十三四歳から、十六七歳に過ぎないものでも、評判ものになると、一幕を演る丈けで、四五十元も、七八十元も、多い時には、百元以上も取れる。又近年は、女優熱が、次第に高まつて来たので、其の給料も、次第に高まり、最高額になると、一ヶ月の収入が、二三元から、四五千元もあるものが居る。

八 俳優雑俎

(イ) 俳優の地位

支那役者の社会的地位は、もと非常に低かつた。勿論今日でも、一般の人からは、まだ高く見られてゐない。丁度日本の役者が、もと河原乞食と賤められ、一般人と齒せられなかつたのと、同様である。支那人の社会的地位は、もといろ／＼澤山に分れてゐて、例の床屋や、湯屋の権助などは、最も低い地位を占め、一般社会から、輕蔑せられてゐたのだが、役者も、矢張彼等と、同等の地位に居り、如何に、其家に、秀才

が生れてゐても、科擧の試験に對しては、三代（父、子、孫）は受けられなかつたが、こんなに、社会的地位は、至つて低くても、王公大官などの交際振りは、實に平等視せらるゝ程で、其の訪問のときなど、ドシ／＼と、奥の室に進み入り、主人と平氣に談笑したものである。

今日では、新しい風の吹き廻しで、世間からも、ダン／＼と、役者を尊敬するやうになるし、役者自身も、稍や新智識あるものは、藝員たるを自覺するやうになりつゝ、あるので、役者の地位も、従前に較べて、次第に高まりかけてはゐるが、前途尙ほ遠である。

(ロ) 家傳と一代

支那の役者も、日本のそれと同じやうに、大半は家傳になつてゐて、一代出身のは、至つて少い。支那では、先祖から役者を營業して来たものや、科班出身のを、内行といひ、然うでないもの、即ち票友出身のを、外行といつてゐる。今日北京や、上海な

どで、有名な俳優につき、其の家柄を調べて見ると、大抵内行出身のものであつて、外行出身のものは、非常に少い。前にもいつたやうに、たとへ家業は繼續しても、其の役者の名を世襲することは、餘り多くない。而して一代出身のものは、もとは相公出でと、票友出でに多く、票友は、本來固より役者を營業するものではないが、家傳であるのは、至つて少く、殆んど皆其の人一代であらう。

(ハ) 俳優の附屬者

支那の役者には、中等以上のになると、いろ／＼な附屬者があつて、只一人で、劇場に乗り込むといふことは、殆んどない。其の附屬者といふのは、父兄の外に、先づ一番に、胡弓の彈手、それから大鼓（單皮鼓）の打手、それに髮結ひ（衣裳をも着ける）と、ボウイ、（跟包的といふ）此の四人は、一寸した役者になると、皆各々引連れゐるので、毎日役者と共に、劇場に遣つて来て、それ／＼働くのである。右の外に、役者によつては、或は師匠、或は世話人（頭目といひ、劇場で、或る役者を聘するときは、必ず

其の頭目の手を経ねばならぬことになる）が、必ず付き添ふものである。そして彼等（父兄を除く）に對しては、固より一定の報酬が、毎日必ず支給せらるゝ。

(ニ) 俳優の住居

役者の住居といつたつて、普通人と、格別異つてはゐないが、家構へなど、別に普通の家と違つてはゐない。そしてその室内の模様など、勿論貧富によつて、いろ／＼の差はあるが、どの役者の宅に往つても、すぐに眼の付くのは、多くはその中央の間に、彼等の祖神、即ち芝居の神として崇められてゐる、唐の玄宗帝を祭つてあるので、内の者でも、外からの客でも、先づ一番に、その前に来て禮拜する。それから室内の一方には、必ず幾ツかの芝居の衣裳箱が、積み重ねてあり、又その傍に、例の長い髯や、雉の尾羽や、胡弓が掛つて居り、それに二三本の芝居用の槍や、棒が突立つてゐるのを見受くる。又役者によつては、女用の靴や、大鼓もある。又座敷を覗くと、これも貧富によりけりだが、概して綺麗に掃除してあつて、大きな姿見の鏡や、額や、掛

物が掛り、その文字は、大抵最負の先生の中で、官吏か、學者である人々から、書いて貰つたのである。

殊にもとの相公出身の役者の座敷や、部屋は、流石履歷付きである丈けに、ナカ／＼派手に裝飾せられてゐる。中等以上の役者の中には、大抵一人か二人の子供弟子がゐて、客でもあると、大抵その弟子が、取次や、御茶の給仕を勤むるやうだ。北京の役者で、自宅に電話を掛けてゐるのは、まだ割合に少く、僅に、余叔岩、劉鴻升、梅蘭芳、尙小雲、王蕙芳、朱幼芬、姜妙香、姚佩秋、小翠花等二十餘人位である。

(ホ) 俳優の風俗

風俗といつても、こゝでは、只衣裳や、冠りもの、穿きもの、頭髮についていふのだが、衣裳は、中等以上の役者で、収入も可なりあるものは、何れも華やかなのを用ひ、冠りものは、支那式のもあれば、西洋帽のもあり、靴も、常人のよりか、綺麗なのを穿いてゐる。前清時代には、相當な役者は、大抵小帽の額上に、貴重な珠玉を着け

靴も、刺繍したのを用ひたものだが、民國以來は、多く見受けない。又辮髪頃は、結び方も、常人と違ひ、華やかに洒落れてゐたが、近來は、大抵散髪になつたので、普通のもの、格別違はない。又錢をあまり持たないか、或は一種の氣質を有つてゐる役者は、大きな帯を腰に捲き付け、一見俠客か、賭博打ちのやうな風をしてゐる。女優は、頭髮といひ、衣裳といひ、普通の婦人よりか、餘程派手で、洒落れて居り、又帽子や、靴なども、華やかなのを用ふるので、一寸藝者と間違へらるゝ位である。又子供役者(男子)も、家に相當の財産のあるものは、衣裳も、立派で、帽、靴にも、善いのを用ふるので、如何にも華やかで、可愛らしい。

要するに、さすがは藝人だけに、男優でも、女優でも、子供役者でも、すべての風俗が、どこかに、普通人と違つてゐて、如何にも派手で、洒落れてゐて、役者であるといふことは、直ぐに判り、たとへ洒落れてゐなく、粗末なものを着けてゐても、何處やらに、役者地味が現はれてゐるので、常人と直ぐに區別せらるゝ。又前にいつたやうに、一種のゴロ然たる風俗をしてゐるのは、何人の眼から見ても、役者であるこ

とが、直ぐに判かる。

(一) 俳優の飲食物

支那人は、元來飲食物に對し、非常に注意深く、子供でも、日本人の如く、熱いものと、冷たいものを取混ぜて、無茶に飲食するやうなことは、決して爲さない。殊に役者は、咽喉を最も大切にする點からして、此の方面には、非常に注意する。その中で、最も注意するのは、餘り甘いものと、餘り鹹いものとで、宅では固より、宴會の席などでも、殆んど喰べない。殊に子供役者で、十四五歳で、聲變りのする頃には、此等の食物を非常に注意する。又餘り冷いものは、飲みもしないし、多く喰べもしない。

酒と、煙草とは、彼等の中では、殆んど禁制にしてゐるのが多く、殊に子供役者には、絶対に禁止せられてるのが多い。もとより、大人役者の中には、非常な酒豪が居て、斗酒尙ほ辭せず、例の高梁酒を、グン／＼飲んで、平氣なのもゐて、その歌の上に、

少しも影響のないのもゐるが、それは例外である。

(二) 俳優の夫婦

役者の夫婦といへば、東西各國、いろ／＼な珍聞もあるやうだが、支那の役者にはその點は、割合に少い。私がこゝでいふ夫婦といふのは、一ツは俳優の妻と、一ツは女優の夫とのことであるが、支那の役者は、大昔こそ、社會上の地位も、左程に低くながつたが、近世になつてからは、役者自身の實質が、次第に墜落して來たのと、その他、いろ／＼な關係から、その地位が、非常に低く鄙しくなり、全く一ツの特別な下等階級となつて來たので、その結婚關係も、殆んど全くその階級の間のみに限られたやうで、その結果として、結婚も、彼等仲間に行はれ、全く違つた他の階級から妻を迎へたり、又娘を遣つたりするのは、極めて少い。

役者の妻といふと、外國人には、すぐに藝者のことが、引張り出され、某の妻は、藝者ではあるまいか、あれはキット曰く附きだと噂するものもあるが、其の實、藝者

で役者の妻になつてゐるのは、極々の少数で、その妾、即ち姨太々には、藝者出身のが多い。又夫が現に役者をしてゐるのは、其の妻には、役者させず、又女優の夫は、もと役者で、今は廢業してゐるのが多く、夫婦共稼ぎしてゐるのは、至つて稀である。

(チ) 女優と結婚

近來は、女優が、ナカ／＼多い。その年齢は、固よりマチ／＼で、三四十歳のものもゐるが、多くは二十前後のもので、又評判の高くなつたり、最負客の附くのも、矢張年若の女優である。多くの女優は、年の若いのと、種々の關係とで、獨身者が多いので、そこが又野心家の第一に注目するところであつて、いろ／＼な手蔓を求めて、女優に接近するやうになり、遂には新聞の艶種になる秘密の行動さへ演ずるやうになるが、その中には、熱度が、いよ／＼昂まつて、終にはその父兄やら、親方に相談し、相當の金を出して、受け出され、妾となつて、全く廢業するものも居る。だがどちらか

といふと、女優の中には、正式に結婚して、人の妻となつてゐるのは、少く、多くは、情夫を据えて、その日々々を送り、或は全く獨身を守つてゐるものもある。

(リ) 俳優の品行

品行といふと、ナカ／＼六ヶ敷、多くの役者中には、種々な人物がゐて、品行の方正なものもあれば、亂暴なものも居り、固より一概にはいへないが、支那の男役者は、普通女に對して、殆んど全く禁制である。知らない人は、直ぐに役者は、さぞ女に持つてゐるだらう、盛んに藝者買ひをするだらうと、速断するが、その實、ナカ／＼さうでない。勿論年頃になると、大抵妻帯はする、中には、藝者買ひするものもある。けれども、概していふと、非常に房事を慎み、藝者買ひを避ける。それは、女に接する度が多いと、第一に、嚙子（咽喉聲音）が悪くなるし、第二に、氣力にも影響するからである。殊に十四五歳から、二十歳未滿の子供役者で、女に接したものでなら、其の影響は、非常なもので、昨日まで、美音で歌ひ、活潑に立ち廻つてゐたものも、忽ちに大

影響を受け、技藝は退歩し、評判もなくなつて仕舞ふ。だから、支那の男役者は、女に對しては、概して冷淡な地位に立つてゐるものと思つてよい。女優の中では、最も著名なのであつたり、又一定の夫があるのは、固より品行をも重んじ、猥りなことはしないが、普通の女優や、又名譽をも餘りに構はないものは、陰に情夫（一人に限らず）を持つたり、或は殆んど妓女と違らないやうに、密に色を賣るものも少くない。

(ヌ) 俳優の氣質

支那役者の氣質は、素人の思ふやうに、ヂョベ〜してゐない。勿論彼等仲間には、種々な關係から、概して一種の厭な弊風もあるが、割合に淡泊で、サワ〜して居り、一寸俠客めいた所が頗る多い。又その扮する役柄如何によつて、其の氣質も、自から異つてゐて、例へば、女役になるものは、自然と優しく柔かに、武劇の立役を勤むるものも、自から活潑で、時に荒々しいところがある。

(ル) 俳優の財産

支那役者の給銀は、割合に高い。勿論地位によつて、ダン〜にある。幾十年も働いてゐて、一日僅に一二元しか取らないものもあるが、有名な役者になると、一幕だけ演つて、四五十元から、七八十元、或は百元以上、時としては、二三百元取るものもある。尙ほ大官か豪商などの宅で、芝居を演る時などは、一人で、五六百元貰ふこともある、即ち前年死んだ譚鑫培や、今の楊小樓や、余叔岩や、梅蘭芳や、女優で、金少梅や、碧雲霞、青年役者で、尙小雲や、小翠花などは、芝居からの収入は、随分多くある。ところで、其の役者の財産調をして見ると、富裕なのは、至つて少い。今日の役者で、先づ富裕なのは、張家口に老臥してゐる名優十三旦や、故人の劉鴻升などが筆頭であらう。梅蘭芳などは、まだ〜大富裕な方ではない。

(オ) 生命と老後

支那役者の生命は、もとより各人各様で、一概にはいへない。一時舞台の花と歌はれたのが、忽ち消えて痕のないものもあれば、何時までも、コッコツと、白髪を垂れて、舞台に出てゐるものもある。前年死んだ名優譚鑫培は、七十一歳まで、絶えず舞台に出てゐたし、同じ名優の孫菊仙は、今年八十餘歳になるが、矢張時々劇を演る。今その生命を評判の方と、身體の方との二方面に分けて、ザットいつて見ると、評判の方では、老生や、大花臉や、青衣や、老旦や、いはゞ多く體を使はず、重に咽喉を使ふ役目にあたるのは、割合に評判を長く維持することが出来るが、花旦のやうに、純粹な色女に扮する役者は、容色を主とするところから、二十四五歳を最盛とし、それから次第に歳が加はり、容色が衰へると、従つて評判を長く續けることは、六ヶ敷くなる。又重に咽喉を使ふ役目にあたるものは、一旦聲が悪くなつて、歌が善く歌へなくなると、其の聲價は、直ぐに下落する。

身體の方では、文劇を演る役者は、たとへ歳を取つて、五十にならうが、六十にならうが、續けて舞台に登られるが、これに反し、武劇を演つて、立廻りを激しくする

役者は、普通二十五六歳から、三四十歳を最盛の時代とし、長く續けて舞台に出ることは六ヶ敷い。

子供役者の生命は、聲變りのする（大抵十四五歳から、十七八歳）のを一ツの期限とし、まだ聲變りのせない間は、非常に名譽を博してゐても、一朝聲が悪くなると、評判が忽ち落ちて、殆んど一時生命を失ふことになる。勿論これは、文劇を演るものが甚しくて、武劇を演るものは、それ程には、影響はない。又女優の生命は、文劇も武劇も、重に容色を尊ぶところから、評判の一番宜しいのは、矢張、二十歳前後から、二五六歳までで、それ以上になると、非常な技藝を具へてゐるものか、素敵な美人の外は、聲價を持續することは、不可能である。

役者の老齡になつて、舞台に出ないやうになつたものは、家に相當な貯蓄あるものは、何もなくても、宅に居て、二三の徒弟を教へて、餘生を送り、或は役者の宅に聘せられたり、或は、科班（子供役者養成所）の教師になつたりしてゐる。役者を廢業して、他の職業に就くものは、殆んどない。

(7) 俳優の親方

役者には、大抵師匠とか、親方とかいふのが、必ず附いてゐる。殊に女優や、子供役者には、必ず一人づゝの親方が附いてゐる。その關係は、女優や、子供役者は、僅かの取除けの外は、その親方に、一定の年期で、父兄等から、預けられたり、或はその親方に買はれてゐるのである。そこで、その親方は、彼等に藝を仕込み、既に舞台に出るやうになると、収入は、すべて親方に取られて仕舞ふ。彼等親方は、もと役者か、又はそれに縁のあるものが多いが、その人は、概して、残忍非道で、その女優や、子供役者に對する仕打ちといつたら、それは、實に酷くて、お話しにならない。(固より藝を仕込む上からいふと相當の嚴重は必要である)いはゞ、飼主と奴隸とのやうな鹽梅で、女優等の方からいふと、誠に憐れで、同情すべき點が多い。そこで、餘り残忍な親方になると、彼等女優や、子供役者は、苦痛に堪えず、時に逃走をしたり、自殺を企てなどして、一種の悲劇を演出することがある。

(カ) 招師と徒弟

拜師といふのは、役者が一人の先生を聘して、芝居を學ぶことで、兩人の關係は、全く師弟といふことになる。此の拜師をやるのは、子供が初めて劇を學ぶものと、既に一人前の役者になつてからも、尙その上に技藝を進歩せしめんが爲め、有名な先生(固より名優)を聘するものがあつて、其の際には、自宅か、或は料理屋に宴會を催うし、先生に對しては、恭しく叩頭の禮を行ひ、又一定の祝儀を包む。又先生に對する報酬については、一劇につき、何程と定むるものもあるが、或は一月に何程、又は一年三度の節季(五月と八月と年末)毎に、禮物(金と品)を贈るものである。

有名な役者になり、又相當の役者になると、大抵一人か、二人の子供役者を自宅に蓄えてゐるものだが、それは、一定の契約があつて、年期を定めて、藝を教ふる。その期間は、一切の衣服、飲食、すべて、師匠の方より支給するのであるが、其の代りに、藝が相當に出來、舞台に出るやうになると、其の収入は、すべて師匠の所有に歸

する。其中幾分かは、弟子に分配することもある。

(ヨ) 嚙子の養生

毎度いふ如く、支那役者には、嚙子、即ち咽喉が、非常に大切である。それで、彼等は、非常に飲食物に注意する。殊に酒と、煙草を大に避ける。女色は殊に甚しい。其の外、聲を養ふためには、宅に居る時でも、常に屢々壁に向ひ、庭に出て、大きな聲を出すのだから、殊に努めるのは、一年を通じて、朝早く起き、外に出て、成るべくは、城壁の上とが、廣い野原(成るべくは河が池に沿ふた場所)に出て、いろ／＼な方法に依つて、聲の養成を努めるが、殊に冬季嚴寒の頃が、最もよい。だから北京でいふと、順治門外の西の城壁に沿ふた所とか、前門外の天壇附近は、彼等が、咽喉を練習するに、最も適當とされてゐる場所であつて、夏冬共に、早朝は、種々な役者が群つてゐる。又特に聲をよくする一種特別の妙薬もある。

(タ) 俳優と學問

今日の役者には、學問のあるのは、殆んど稀である。今日ばかりでなく、清朝歴代の役者について、調べて見ても、普通は、稍や學問のあるのは、至つて少ない。有名な故譚鑫培でも、多少文字には通じてゐたが、學問としては、殆んど無い位、今日北京で大持ての楊小樓でも、梅蘭芳でも、學問の點からいふと、恥かしい程である。老優の孫菊仙といつても、多少文字を解するに過ぎない。先年死んだ汪笑儂といふのは、舊と讀書人出身で、相當な官吏から、役者仲間に飛び込んだものだから、稍々見るべき學問があり、脚本も、自分で作るし、又詩も可なるに作つたものだ。今日の役者中で、先づ普通の學問のあるのは、僅に一人の貴俊卿(これも讀書人出身)あるばかりで、時慧寶なども、幾分文字の判る方である。女優は、尙ほ更ら、子供役者の中でも、手紙が、満足に書けるものは、至つて稀で、科班の子供でも、文字の判るのは極めて少い。

だから、彼等役者が、芝居を稽古し、台詞を覚えるのは、重に口傳へで、暗誦的に耳から入つて、口から出で、眼を使ふことは、殆んど稀である。それだから、彼等役

者の耳覺は、至つて敏捷で、よく聽き分け、同時によく記憶力に富んでゐるところから、芝居を習ふにも、素人の意外とする程、速に覺える。然し覺えはよいが、もと無學で、鵜呑みに記憶してゐるのだから、その台詞に不適當な文句があり、又誤字があつても、平氣の平左で、一向に之を以めたりすることをしない。

(レ) 俳優の詩作

左に戒台寺（此の寺は、北京の西方西山にある有名な大伽藍で、役者が多く參詣する）の壁上に書いてある諸名優の自作の詩や、貴俊卿の次韻のや、それに汪笑儂の諸作を掲げよう。

▽行脚吟 譚鑫培提

法華眞諦索一乘。欲轉金輪力未能。到處琳宮都訪遍。最難相遇是高僧。

芒鞋竹杖任西東。欲向如來證大雄。枉費奔波半生力。那知佛在自心中。

▽中華民國二年陽歷六月廿八日 羅田勝孫余三提

癸丑年朝戒台山。保佑老母永壽延。上山拜洞求光顯。消災○禍保平安。
閒○事把書看。悶來遊遊上高山。有朝一日回家轉。心寬體胖樂安然。

▽已卯春 楊小樓筆

名利何足貪。春遊入煙山。甘露天上降。○○○頭懸。覺神○无○。慧棄道心安。

▽舊歷癸丑年四月朝 守靜居士提（即時慧實）

抬頭一看山對我。綠樹影々千萬棵。在此閒居多快樂。拋却紅塵修善德。

▽甲寅雲遊子 王又宸提

地藏會赴戒台山。青松古剎嶺上懸。爲人得此閒居處。不聞世事勝似仙。

▽舊歷癸丑年三月念六日 普賢聖會末弟子 時慧實提

此院十碑額。乾隆嘉慶刻。光陰如箭快。如今換民國。展眼數十載。兒童兩鬢白。細想人在世。不如樹草多。

▽和聽花原韻 貴俊卿

浪迹萍踪話宿緣。飄零法曲愧當年。都門邂逅欣無恙。養氣如公本浩然。

（字句には改めたところ）

るが

▽月下美人 汪笑儂

殘妝卸罷黃昏後。小步閑階趁月行。偶立東牆旋顧影。本來南國最多情。前身合住瓊樓冷。對面如窺寶鏡明。欲向嫦娥問消息。廣寒高處作麼生。

▽簾下美人

誰家少婦太嬌羞。整日慵妝懶下樓。雲鬢霧鬟看隱約。花香氣總勾留。望穿秋水垂珠箔。割斷春風冷玉鈎。不捲重簾原有意。怕人偷眼看梳頭。

▽燈下美人

玉暖花香人半醉。小郎經得幾温存。故燒高燭夜如晝。半卸殘妝春有痕。好趁十分光照眼。直將一片影消魂。等閑撤去金蓮炬。嫫母西施未易論。

▽花下美人

竝向百花深處立。滿園春色屬東君。腮如桃瓣凝紅雨。面映梨花暈素雲。鬢影堆鴉疑髮髻。衣香引蝶醉氤氳。與郎低問妾顏色。儂比芙蓉勝幾分。

▽黨人碑新劇酒樓題壁詩四首

連天烽火太猖狂。那箇男兒死戰場。北望故鄉看不見。窮途低唱小秦王。杜鵑聲裡不堪聽。記否前朝蜀道鈴。熱血一腔無可洩。哀猿叫斷遠山青。書生速謗不知官。兩字功名上水難。欲叩九關何處是。榴風沐雨走長安。長安雖好不爲家。撲面西風日已斜。豎子安知亡國禍。忍心高唱後庭花。

▽改良戲曲

誰將樂府翻陳案。極力開通到下流。千古興亡真是戲。一般教育學而優。歌詞盡作新思想。褒貶全憑舊理由。珍重梨園與菊部。顧名當不負春秋。

〔ソ〕俳優の娛樂

優 俳
役者の娛樂といつて、別に普通の支那人と違つたことは、殆んどない。矢張、一般に、いろ／＼な小鳥を飼つて、囀づらせて樂んだり、或は、小狗を養つたり、又は、いろ／＼なる植本鉢を置いて樂んだりしてゐる。少し風流氣のある役者は、法帖を見て、

字を習つたり、或は繪などを書いて楽しんでゐるものもあるが、これ等は、至つて少い。又彼等の中には、秋になると、いろ／＼な小蟲を飼つて、鳴かせたり、聞はせたりすることが流行するが、例の蟋蟀は、最も、好きなので、中にも、故譚鑫培は、その娛樂で、有名であつた。概していふと、一般の役者の娛樂としては、矢張麻雀牌といつて、一種の賭博具を弄び、金錢を賭けて、之を遊ぶことが、一番嗜きである。

(ツ) 俳優と書畫

支那の役者は、一般に無學文盲であつて、又その嗜みとして、書畫や、骨董をいぢるものも、割合に少い。だが、生來の風流や、もと相公生活をした役者などは、書畫や、骨董や、植木などに、趣味を持つてゐるものも少くない。その中で、自身で字を書いたり、繪を書いたりするのは、至つて少く、幾千といふ澤山な役者の中で、僅に數へるだけしか居ないが、先づ書の方からいつたら、北京にゐる時慧實などは、可なりにも上手に書き、殊に六朝風の筆法に妙を得てゐる。朱素雲といふのも、可なりにも

を書く。又先年死んだ汪笑儂なども、字が書ける方で、私の處にも、南京で書いて貰つたのが、數枚ある。有名な譚鑫培や、楊小樓や、龔雲甫などは、此の方にかけては、惜いかなゼロである。

繪の方では、北京の姜妙香や、王瑤卿や、王蕙芳などは、上手の方で、重に山水よりか、花鳥を書く。其の筆勢も、頗る妙で、これを壁間に掛けて置いても、見苦しくない。孫怡雲も、可なりに繪く。又前の時慧實は、書の外に、指の先きで、蘭や、菊や、竹を書くのに、一種の伎倆を持つてゐて、私も二三枚書いて貰つたが、可なりの出來である。又上海に居る老優劉永春といふのは、金魚を繪くのに妙を得てゐる。

(ネ) 俳優と信仰

役者は、何處の國の役者も、縁起を重んじたり、迷信を守つたりするものだが、支那の役者も、其の例に漏れない。役者の信仰といつて、別に特別なものはないが、先づ文武に分ち、陰陽道から割り出した一種の天神が定められてゐて、役者は、深くそれ

を崇め奉り、この外に、前にもいつた演劇の祖神としてゐる唐の玄宗皇帝は、役者の第一の守神になつて居り、毎日香を焼いて祭つてゐるが、その外、壯年の役者や、老優中には、佛教や、道教を信仰するものが、随分居る。例の譚鑫培や、楊小樓や、時慧賢などは、随分の信仰家である。又役者達のよく参詣する場所は、自ら一定してゐて、我が東京でいへば、水天宮とか、金比羅さんとかいふやうに、北京では、白雲觀、西山の戒台寺と、妙峰山とが、最も多く、南方では、浙江の舟山島にある普陀山寺が、彼等の最も信仰する所であつて、名優で、金に不自由なく、暇さへあれば、毎年時を定めて、此等の場所に、参詣する。譚鑫培なども、戒台寺や、普陀山寺には、毎年一度必ず参詣したものである。

(ナ) 俳優と迷信

藝人は、何れの國でも、非常に縁起を八釜しくいふものだが、支那の役者も、さうである。従つていろいろの迷信が、彼等の間に行はれてゐる。その一ツ二ツをいつて

見ると、夢の字を芝居小屋の樂屋か、舞台の上で、語ることを非常に忌む。又彼等役者は、雨傘を持つて、樂屋に入つたりすることを避ける。或は途中で死人を見たり、葬式に出遇つたりするのを、非常に縁起悪くする。又芝居が始まつた際、酒に酔つたものが、小屋に来て、種々と騒ぐのも、非常に忌み嫌つてゐる。まだ一一擧げると、澤山あるけれども、畧するとして、要するに、これ等の迷信には、いろいろな縁起があつて、これが爲めには、彼等の心理に、一種の影響を與へ、その結果、技藝の不振を招いたり、營業の繁昌を妨ぐるやうになるので、外人から考へると、如何にも、奇妙で、可笑しいけれども、彼等役者は、今尙これ等の迷信を固く守つてゐる。

(ヲ) 俳優と寫眞

今日でこそ、一部の役者、殊に梅蘭芳とか、尙小雲の寫眞などは、到る處の店頭に賣られ、劇趣味のある人々の宅にも、掲げられてゐるが、此等は、特別なので、元來支那役者は、寫眞を撮つたり、寫眞を掲げたりするのを、非常に厭がる。それは矢張

一種の迷信から來てゐるので、その迷信といふのは、寫眞に映つると、神魂がなくなつて、生命を縮めるとか、又自己の技藝が、これが爲めに退歩するといふのが、重なる原因である。又寫眞を人々に持て囃さるゝのは、いはゞ我身を曝らされるやうに思はれるので、非常に厭がる。それならば、舞台に出て人に見られるのを何故厭がらないか、その名の高まるのを何故希望するか、寫眞の例と、全く反對ではないか、と非難さるゝのだが、そこが所謂迷信と、固陋なので、仕方がない。

(ム) 俳優の似顔

日本の役者には、所謂似顔といふのが、昔からあつて、江戸の錦繪や、草冊紙に書かれたり、又芝居小屋の表看板にも、役者の似顔を書いたもので、又近頃では、錦繪や、繪葉書や、雜誌類にも、矢張役者の似顔が、よく書かれてある。これと同じやうに、支那の役者にも、もとは似顔が多少書かれたもので、その種類は、日本とは、違つて、至つて狭い範圍で、今の北京前門外の廊房頭條や、その附近の燈籠屋の表看板

に、よく當時有名な役者の似顔が、數名並べて書かれたもので、その畫工にも、随分な名手を選んだものである。又正月前から賣り出す繪草紙にも、今日でも、よくその似顔が書かれてある。

(ウ) 俳優の最負客

支那の役者にも、藝が善く出來たり、又は容貌が美麗であつたりすると、いろいろな最負客が附く。その客の種類には、いろいろあり、眞にその藝を賞し、これを奨励せんがために、親切にいろいろ世話もし、或は大金を出して、親方から、其の身を受け出して遣るのもあれば、又は一種の色慾からして、これを翫弄せんが爲めに、女優や、子供役者を猥りに最負するものがある。殊に近頃の北京劇界には、右にいふ色慾的な最負客が多く、いろいろと、手蔓を求めて、役者に接近し、秘計を運らすことゝなる。その最負客の遣り方には、金のあるものは、時々芝居の衣裳や、道具を買つて遣つたりするのがあるが、普通は、宴會に呼んで、馳走をするのが多い。若し女優や、

子供役者で、色慾的な最負客に引き掛ると、たとへ一時は利益はあつたり、面白かつたりするが、終には、いろ／＼な弊害を受けて、藝も退歩し、名譽も悪くなつて、前途有望であつたものが、遂に墮落の淵に沈むといふやうなことになるのが多い。

(ネ) 俳優の名刺

俳優にも、それ／＼、名刺がある。前清時代には、矢張紅紙のを用ひたものだが、今日では、或る一部分を除く外は、皆外國式のをを用ひる。

觀劇

靜亭主人

茶園樓上列粉々。宦歎遊來氣燄焦。座褥橫鋪盤腿坐。手搖團扇假斯文。

第四劇場

一劇場

支那では、劇場のことを、俗に戲園子とか、戲館子とかいひ、従來は、南北を通じて、何々茶園、例へば、丹桂茶園とか、天樂茶園とか、天仙茶園とか、文明茶園とかいつたものだが、近來上海邊では、劇場の構造に、大改良を加へ、所謂新式の舞台が出来たので、茶園の名を廢し、何々舞台といふのが、大流行となり、例へば、丹桂第一舞台とか、大舞台とか、新新舞台とか、盛んに舞台の字を用ふるやうになり、北京でも、最初出来た新式の劇場をば、第一舞台と名け、先年漸く出来上つた新式の劇場をば、新明大戲院といつてゐる。

(イ) 常設と假設

劇場には、無論常設と假設とがあるが、都會や、貿易港には、皆常設のがある。そ

の中常設劇場の最も多いのは、いふまでもなく、北京で、その數二十二三あり、上海が、其の次ぎで、十七八もあり、この兩地が、中心點となつて、南支那（實は中部支那）と、北支那との劇場を代表してゐる。その他、天津にも、六七ヶ所あり、漢口にも、五六ヶ所あり、尙各省の首府や、都會や、開港場等には、大抵三四ヶ所か、一二ヶ所の劇場があつて、大抵年中絶えず芝居を興行してゐるが、之を合計するならば、全國で、必ず一千ヶ所以上には上るであらう。以上は、常設の劇場に就いていつたのであるが、その外に、廟とか、町とか、村落とかに、或は祭事なり、或は祝事なり、或は營業の爲めに、臨時に小屋掛けをして、芝居を興行することがある。

(ロ) 劇場の所在地

劇場は、何處のものも、繁華な場所に接近して設けられてあるのが多く、時には、場末に建てられてあるものもあるが、それでも、矢張交通の關係か何かで、客を引くの都合のよいことが原因してゐる。北京の劇場は、前門（即ち正陽門）外の大柵欄といふ、

最も繁華な場所を中心とし、上海のは、元英租界の四馬路といふ、これも非常に賑やかな場所を中心として居り、何れも藝者屋とか、料理屋の立ち並んでゐる最も賑やかな街に接近してゐる。その大柵欄といふ一ツ街にさへ、現に四ヶ所の劇場があり、その附近に、散在してゐるのが、五六ヶ所もある。又城内の東安市場といふ處には、もと三ツの劇場が、頗る接近して、立ち並んでゐたが、今日はたゞ一ヶ所ある。

上海では、四馬路といふ處に、四五ヶ所あり、それに接近した街々に、一二ヶ所づゝの劇場が立つてゐる。又城内の城隍廟邊にも、二ヶ所ある。天津では、俗に三不管といふ處を中心とし、（此處は、料理屋と、藝者屋の巢窟である）其處に三四ヶ所の劇場があり、その外、日本や、その他の外國居留地にも、大抵一ヶ所づゝの劇場がある。漢口の劇場も、支那街の繁華な處を中心とし、外國居留地や、その他賑やかな場所を擇んで建つてゐる。

二 劇場の外観

劇場の建築は、従来のは、大抵瓦屋根の二階建てで、普通の人家よりも、屋根がズツト高く、その入口には、北京のは、大抵大黒柱でも見たやうな大柱が、二本左右に高く立ち、何々茶園とか、何々樓とかいふ立派な横額が懸つて居り、殊に北京の劇場には、その日芝居のある目標として、右の大柱に、小さな紅い木札が、吊り下げてあつたり、或は、屋根の上に、高く一種の旗が掲げてあつたり、或は、其の日の出し物に使ふ道具の中で、虎とか雲とか、大鎚とか、大旗とか、樹木とか、の造り物を入口に並べてある。そして門を入り、二折して本場に達する。これが舊式の劇場であるが、近年出来た上海の新式劇場や、或は、北京の第一舞台などは、大のハイカラ式で、大抵煉瓦造りや、半木半瓦の三四階建てで、堂々と空高く聳え、玻璃窓が、綺麗に並び、その入口など、鐵柵を設け、洋式に立派に出来てゐる。

三 舞台

支那では、舞台のことを、戲台とか、前台とかいひ、劇場の中央に近く突出して居

り、土間から、三四尺許り高く、その廣さは、普通三間四方位で、すべて石板か、木板を張り詰めたり、或は支那煉瓦を敷き詰めたりしてある。そして前端の左右には、各徑一尺許りの大きな漆塗りの圓柱が立つてゐて、それに二本或は一本の鐵桿を舞台から、一丈位離れて、高く横へてあつて、主に武劇を演ずる際に用ふる。そして舞台の前と、左右の三面には、約一尺餘の高さの欄干を繞らし、その後面は、主に板壁にて、樂屋と隣し、その左右の兩端には、各幅四五尺の狭い門が開いてゐる。舞台に對して、其の門の左のが、上場門、即ち役者が樂屋から舞台に上る口で、右のが下場門、即ち役者が舞台から樂屋に降る口である。そして舞台の中央の上の天井には、三尺四方位の孔が切り開いてあつて、俗に天井といひ、これは役者の聲の反響を助けたり、又役者の武藝を演ずる際に便利になることがある。そして普通舊式の劇場には、廻り舞台もなければ、花道もない。舞台の中では、前面の三分の二が演劇の場所で、残りの後面が、囃方の居所、一寸見ると、橋掛りを取り除けた我が能舞台の模様によく似てゐる。

(イ) 舞台の裝飾

舊式の劇場では、舞台の裝飾といつても、別に何程でもないが、ザツト説明すると、舞台の上面には、大抵丈夫な花模様のある毛氈を敷き詰め、正面の板壁には、大抵一面に、支那流の刺繡を施した五彩の繻子や緞子の幔布を垂らし、それに一面の大鏡を掛け、聯句を書いた柱隠しのやうなものが、其の左右に懸り、又その上に、大きな横額が懸り、又出入の兩門口には、彩布を垂らし、その上に、小額が懸つてゐる。そして前にいつた二本の大柱には、柱隠しを懸け、それに題してある聯句と、大小の額面に書いてある文句は、何れも演劇に因める風雅で優美なものばかり、その筆跡も、ナカ／＼見事である。

(ロ) 廣和樓とその他

左にその二三の例を引くと、前にいつた前門外で、肉市といふ横町に、廣和樓とい

ふ舊式の劇場がある。これは、前清の初めに建てられた頗る歴史附きのもの、芝居好きの康熙帝や、乾隆帝は、時々忍び足で、此處に觀劇に來られたものであるが、この劇場の舞台の大柱に懸つてゐる聯句は、左の通りである。

學君臣學父子學夫婦學朋友棄千古忠孝節義細細看來慢道逢場作戲。

或富貴或貧賤或喜怒或哀樂將一時離合悲歡重重演出管教拍案驚奇。

そして大額には「盛代元音」と書き、小額には、「揚風」「挖雅」と書いてある。廣徳樓のは、大額に「和平以廣德音是茂」と書き、大柱の聯句に、

忠義昭千古試看一片丹心當振今世。

霓裳詠同日共聽九霄餘韻久在行雲。

と書き、天樂園のは、大額に、「洞天樂境」、小額に、「始作」「曲終」、大柱に、

指掌宏圖講孝說忠借衣冠演出炎涼世態。

明心寶鑑尙廉崇節憑面目作盡古今人情。

と書き、三慶園のには、大額に「霓裳三疊」小額に、「翔風」「起雲」、大柱に、

假像寓真情邪正忠奸試看循環之理。

今時傳古事衣冠粉黛共貽色相於斯。

と書き、文明園は、流石北京に於ける最初の幾分改良した新式劇場だけに、大小の横額は全くなく、唯大柱に、

強弱本俄頃願同胞愛國正宗此日漫談天下事。

古今無常理結團體文明進步他年都是戲中人。

と、新式の聯句が書いてある。其の筆法は、文字の國だけあつて、何れも立派で申分がない。

四 樂 屋

次は樂屋であるが、支那では、樂屋のことを、戲房とか、後台とかいひ、板壁にて、直ぐに舞台の後面に接しゐて、大抵は、舞台に沿うて、長方形であり、其の面積は、劇場の規模によつて、廣狹一定しないが、普通長さ十間餘、幅二三間内外である。その

一部の舞台に續く處だけが、二尺餘高くなつてゐて、其の他は、すべて土間である。その高い處は、演劇中の役者が、往來するところ、若くは多く次の幕に出る役者が、既に裝束を終へて準備してゐる場所で、其の土間の中間、壁に接して、後台老板（即ち樂屋監督若くは役者の取締役）が用ふるテーブルと腰掛とがあり、其のテーブルの上には、其の日の藝題を順番に書いた五六寸高さに一尺餘の木板の置物が据えられてある。

(イ) 俳優の部屋

俳優の部屋としては、別に設けられてゐない。すべて此の一間の中で、何れの役者も、化粧をしたり、衣裳を着けたりするので、特別な名優が居る時は、樂屋と少し離れた部屋の一部とか、二階の一間とかを、臨時に用ひ、其處で裝束させて、優待の意を示す。上海の改良劇場中には、幾分か二三人の役者の爲めに、特に部屋を設けてあるものもあるが、一般には無い。

(ロ) 化粧場と劇神

化粧場は、舊式のは、すべて土間で、至つて簡單で、粗末で、只二三の汚ないテーブルに、數脚の腰掛、それに種々なる繪具皿や、筆、刷毛が並んでゐるばかり、其の外には、衣裳箱とか、冠り物箱や、形ばかりの大小道具や、背景に用ふる木板や、布幕、それに刀や、槍や、旗などが並べ掛けられ、それは、非常に混雜してゐて、迎も御話しにならない。浴室の設備などは、勿論絶無である。

又樂屋の一隅には、必ず劇神（普通は唐の玄宗帝）を祭つてあつて、役者の出入には、必ず其の前に來て一禮する。

五 觀覽席

觀覽席は、樓上と樓下とに分るくが、樓下は、すべて土間である。そして樓下の舞台に接近してゐる處、我國でいふ平土間のことを、俗に池子とか、正廳とかいひ、

棧敷下を廊子とか、或は、邊座とかいふ。

(ロ) 包廂

樓上を、すべて包廂とか、樓座とか云ひ、包廂は、大抵一間毎に低い板壁で區劃し、一轉の芝居小屋に、包廂の數は、大抵十四五間ある。各間の前面には、茶瓶や、茶碗を載する丈の三四寸幅の板棚があり、後に腰掛や、一種の椅子が、並んでゐて、大抵十人内外は、大丈夫に容らるゝ。又兩側の庖廂の最端、一折して一間があり、これを倒關といふ。

(イ) 池子

池子、即ち平土間は、其の面積は、大小一定でないが、普通七八間から、十間位の四角形になつてゐて、北京のは、概して幅狭い長いテーブルを、ズラリと舞台に沿うて、幾重にも並べ置き、それに一々長い腰掛を備へ、劇場によつては、其の腰掛の後部に、幅狭い板を打ち附けてあつて、茶瓶や、茶碗を載することゝなつてゐる。又北

京の二三の劇場や、天津、上海、漢口邊の劇場では、普通の平土間には、小形の角テーブルに、數脚の椅子を置いてある。そして舞台に接してゐる左右の狭い土間のことを、小池子といひ、矢張狭いテーブルや、腰掛が置いてある。

併し其のテーブルや、腰掛の並べ方や、置き方が、如何にも窮屈であつて、若し一度其の席に入つたなら、出入は、頗る困難である。そして其の板棚や、テーブルや、腰掛には、大抵幾年か用ひられた淺黄木綿の古びた布を掛けてある。棧敷下の廊子は、只長い腰掛が並べてあるばかりで、テーブルは無い。そして觀客の人數は、大抵五六百から、八百か、千人内外で、普通舊式のもので、満員札止めの時など、千二三百人である。新式劇場には、二千人以上も容らるゝのがある。そして新聞記者席とか、警官席とか、或は休憩室とかいふのは、勿論設けて無い。

六 附屬部屋

其の他附屬の部屋としては、櫃房といつて、帳場、票房といつて、木戸場、茶房と

いつて、湯沸し部屋、衣包房といつて、衣裳預り場などあるが、日本でいふ芝居茶屋といつたやうなものは全く無い。

七 新式劇場

前に述べたのは、すべて舊式劇場のことであるが、上海今日の新式劇場や、北京、天津の改良舞台といはれてゐるのは、其の建築は、いはゞ一種の洋式で、外部は、煉瓦か、半木半瓦の構造に係り、舞台は、殆んどすべて廻り舞台を用ひ、それに種々な背景や、道具を使ひ、幕も用ふる。(舊式の劇場には一切幕を引かない)そして舞台の前端には、座席に面して、稍圓形になつて居り、左右の二大柱は、固より無く、又大鏡とか、大小の額面とか、鐵桿を差し渡したるものなども、全く無い。舞台も樂屋も、可なりに整頓して居り殊に名優の爲めには、特別の部屋が、時として備へられ、囃方は、一向見えぬ處に集め、其の上、光絲にも、通氣にも、可なり注意せられ、又觀覽席は、普通舞台に對して、半圓形になつて居り、二階か、三階に、後部が、次第に高くなつ

てゐる。観客の人数は、舊式劇場に比べて、非常に多く、一杯入ると、二千人から、三千人位である。そして劇場によると、新聞記者席や、警官席を特に設けてあつたり、又場内に賣品所があり、一寸した料理も、造らせることが出来るやうになつてゐる。

八 劇場概評

前にもいつたやうに、新式の改良劇場になると、光線や、通氣は、可なり善く、大抵電燈を点けるので、體裁も好いが、舊式劇場は、いづれも光線が至つて悪く、殊に雨天や、夕刻になれば、非常に薄暗くなつて、舞台に出てゐる役者の顔さへ、少し離れると、ハッキリ見えない。殊に電燈を点けるのは少く、多くはアーク燈を一ツか、二ツ、それも夕暮遅くなつて、漸く点けるので、觀劇を妨ぐることに夥しい。

(イ) 劇場と寫眞

私も先年南京に居た頃、幾度も劇場の内部を寫眞に撮つたことがあるが、ナカ〜

撮り憎く、十五六枚の中で、中等の成績のものが、僅に二三枚しかなかつた。そして通氣の方は、殆んど無設備障子の破れや、板目やら、いはゞ吹き曝らしの爲め、左程でもないが、併し群集混雜の際は餘り善くなく、又嚴寒の時など、其の寒さといつたら堪らない。

(ロ) 苦痛と危険

支那の劇場は、前にいつたやうに、ハイカラ式を除く外は、設備が、非常に悪く、夏は暑くて、冬は寒い。近年は、暑中には、電氣扇を設置したり、人に涼扇を引かせて扇らせたり、嚴冬には、ストーブを置くのもあるが、多くは形式のみで、殆んど實用を爲さない。又支那人は、其の衣裳や、履物の關係や、一種の習慣、性質からして、餘りに暑いとも、寒いとも感じない（勿論酷暑には、肌を脱いでゐるのが多い）ので、吾輩から見ると、不完全極まる劇場でも彼等には、左程でない。だから西洋人などは、劇場で、音樂の騒かしいのと、立ち廻はりの烈しいのと、座席の窮屈で、観客の混雜

と、この暑さと、寒さとは、芝居を見るのは、決して愉快どころでなく、全く一種の苦痛でもあり、又危険でもあるといつてゐる位、成程支那舊式の劇場には、改良すべき點が頗る多い。又昨今は、設備の改良について、種種意見を述べたり、それを氣附いてゐるものもあるが、種々の關係で、これが實行は、ナカ／＼困難である。

九 背景道具と衣裳

支那劇では、書き割、即ち背景と、大小道具を合せて、普通に、切末、或は彩、或は戯具といふが、近來は、背景のことを別に佈景とか、或は彩片とも、畫片ともいふ。併し概していふと、支那の舞台には、新式の中には、舊劇を演る時にも、多少の背景や、道具を使ふが、普通には、背景とか、道具とかいふものは、至つて少い。寧ろ殆んど無いといつても、差支ない程である。けれども、又一面からいふと、其等背景や、道具の無いのが、却つて一ツの特色と見てもよろしい。

(イ) 粗末な背景

前にいつたやうに、支那劇には、背景といふ程のものは殆んど使はない。時々背景見たやうなものがあるが、その製法が、至つて幼稚で、簡單で、粗雑である。其の二三をいふと、木板に、紙や、布を貼つて、山の形を製つたり、繪いたりしたもの、二三板を並べ立て、或は、淺黄とか、黒の綿布で、城門の形を作つたもの、或は木の框に、布を貼り、それに少し彩色にて繪いたものを組み合せて、樓閣の形を造つたもの、或は木板に佛像などを畫いたものなど、其の外には、殆んど見るべきものが無い。新式或は特別の劇場には、多少の背景を用ひ、座敷の模様を畫いたものや、村落や山間の景色などを畫いたものを、一劇毎に取り換ふることがあるが、其の畫方が、まだ善くなく、舞台上演る芝居と、其の景色とが、善く調和が取れてゐないのが多い。

(ロ) 簡單な道具

道具も、背景と同じく、至つて簡單で、粗末なものばかり、其の中で、最も多く働くのが、稍長方形のテーブルと、椅子で、之を積み重ねると、山にもなり、城壁にも

なり、或は一枚の木板に、紙を貼りて、其の上に線を引き。文字を書いたのが、石碑となり、或は二本の竹竿に、彩布を垂すと、臥床となり、或は二本の短旗を、低く横ふると、轎（即ち駕）になり、或は二本の短旗に、車輪を畫いて、馬車になり、其の他、櫓の形とか、馬の鞭とか、酒屋や、宿屋の屋號とか、地名とかを書いた旗や、紙や布で造つた獅子や、虎や、兎や、鶴や、龍の張子や、蝴蝶、燭台、酒瓶、杯、茶器、硯、大木槌、棺、人形、扇子と、刀や、槍や、弓や、旗や、傘や、棍棒などが、その重なる道具である。

(ハ) 各劇と道具

左に常に演ずる各劇に普通用ふる背景と道具の名を舉げて見よう。

- ▽四郎探母……宮殿、軍營の床、令箭、鞭、劍、手錠、
- ▽三娘教子……機房、家法、（一種の鞭）書物、書包、
- ▽桑園寄子……山形、桑樹、衣包、血書

- ▽空城計……城門、琴、酒瓶、劍、羽扇、筆、旗、鞭、
- ▽天水關……關形、山形、宮殿、香案、刀、鞭、羽扇、奏案章、
- ▽硃砂痣……燈、銀子、鏡、結婚證、
- ▽紅梅閣……船形、山形、鬼火、扇子、
- ▽蝴蝶夢……棺材、孝堂（棺を置）蝴蝶、盆、紙錢、
- ▽梅龍鎮……酒店、銀子、扇、盒、手巾、拭布、酒瓶、酒杯、海棠花、
- ▽虬蜡廟……廟形、香堂、扇、刀、槍、棍、棒、袖箭、
- ▽四杰村……村庄、公堂、酒甕、刀、劍、鞭、佛門顏額、
- ▽小放牛……牛形、鞭、笛、
- ▽搜孤救孤……法場、大堂、人形、酒瓶、紙錢、鞭、刀、酒杯、

(ニ) 火彩

火彩といつて、舞台の上で、人の死ぬる際とか、出鱈や、怪物などの出る場合、或

は火花を散らして劇戦したり、火を付けて人家を焼き拂ふ時などに、一人の受持があつて、舞台の一隅から、投げ掛ける一種の火花がある。これは松脂(マツ)を粉にして、それに一種の鋸屑を混じたものであるが、それが上手に投げられると、燦爛として舞台に輝き、實に見事なもので、観客の喝采を博する。稀には、その火花が、十分に燃えないで、途中で消え、鋸屑のまゝで舞台の上に散ることがあるが、誠に見つともないものである。

(ホ) 衣箱と蓋頭箱

各劇場の樂屋には、必ず種々の衣裳箱や、帽箱や、靴箱や、その他種々雑多の大小道具を備へ付けてあるが、普通に、之を大衣箱、二衣箱、蓋頭箱(或は帽兒箱ともいふ)に分けてある。左に某劇場について、私が實地に調査した衣裳や、冠り物や、靴類や、其の他の道具類の目録を掲げよう。

▽大衣箱

富貴衣一件、平金緞蟒十件、男女平金紅黃緞蟒二件、平金緞開廠五件、平金紅緞宮衣一件、平金紅黃藍緞帳六件、藍八卦衣一件、綉花緞褶子十件、紅藍緞宮衣二件、洋緞褶子二件、五色斗蓬蓋六件、紅加宮蟒一件、平金古銅蟒二件、平金黒綠蟒二件、老宮花衣四件、緞宮毛衣一件、綉花道袍六件、古銅褶子二件、青洋緞褶子三件、白褲襖一套、外套子四件、老斗衣二件、洋縐青衣二件、青洋縐褲子三條、花素洋縐腰包四條、青洋布腰包三條、洋縐大坎肩二件、小坎肩一件、小襖四件、褲襖子三套、襖子一件、藍布褲褂二套、象牙笏板四塊、開廠五件、紅黃女蟒二件、平金胡色坎肩一件、青緞袴衣二套、

▽二衣箱

平金五色緞靠十件、平金紅白縐袖二件、平金五色緞馬褂五件、平金紅白洋縐龍套八件、綉花緞袍衣九件、五色素緞袍衣洋緞八件、五色素緞簡袖六件、五色縐子十二條、五色大帶二十六條、青馬褂平金一件、洋緞簡衣七件、龍簡衣五件、花袴衣二套、洋布洋緞袴衣五件、破腰包五條、花洋縐袍衣五件、鬼袴子五件、紅彩褲五條、白女

靠一件、架包一個、龍套四件、

▽三衣箱

紅泥卒坎四件、青布袍四件、青紅彩褲三十條、厚底青靴子五双、辛坎四件、水衣子五件、下手衣四件、背戶把掌十個、背戶旂十件、架杆一個、

▽盔頭箱

翠反正王帽二頂、翠鳳冠二頂、翠耳不聞二頂、帥盔一頂、翠荷葉盔一頂、附子盔五福光一頂、翠七星額子一頂、翠太子盔三頂、翠大額子一頂、文武金刁盔二頂、包巾課子四頂、硬羅帽二頂、軟羅帽五頂、軟巾子一堂、小把巾子八個、大把巾子四個、髻口（大小二十六圈）一堂、玻璃玉帶五圈、五色托頭五個、羅漢頭蓮花燈一堂、大圓籠七個、青緞軟羅帽四頂、小把巾子十二頂、大葉巾紅白黃十六頂、青紅藍白軋尾四個、八仙巾子十五頂、和尚帽六個、扎巾四個、黑白帽頭四個、青托頭五箇、鬼魁星臉三箇、加官財神臉三個、尾翎二對、老虎頭七個、玉帶五圈、大帽六頂、大笛子一對、髮揪耳毛子十三個、草帽圈一對、髮枷子一個、沙帽五頂、桐沙帽三頂、大小

邊樑子一對、火沿一箇、魚照一對、青白蛇軟額子一對、二龍翠簪一箇、翠王帽二頂、太額子二頂、文陽翠盔一頂、半冠一頂、翠大小軋巾課二個、駙馬套一個、二郎金箍四個、遼王帽一頂、架包一箇、小圓籠十二個、

▽雜衣箱

平金紅緞門帘二個、平金紅緞圍棹三個、平金紅緞椅披四個、黃洋縐床帳一個、紅洋縐小帳子一個、五色緞大屠五個、紅白緞標槍旗八個、花雲彩十六扇、全刀槍把子一堂、全公案一堂、加官條子一個、軍門虎旂十二扇、龍虎狗頭形三個、紅椅墊子十二塊、火牌九個、金銀大錘四個、馬鞭子十二個、金銀元寶二箇、新舊寶劍七把、城練子手靠四個、假火洋槍十二杆、真鐵槍六杆、架一個、

▽其他雜具

紅洋緞帘二個、酒斗一個、加官臉一個、烟袋一支、財神臉一個、小馬桶一個、假鴨一隻、紅鬍子一掛、小車衣、牛尿包六個、布衣腰布、扇子一把、緞靴七双、鎧鑼二個、木魚九個、去鼓二個、布紅小車四對、本桶一個、去翎八支、大帽十頂、和尚衣

一件、令旂兩支、老虎臉一個、藍緞大衫一件、木斗二個、白孝袍兩件、美臉人一個、僧衣一件、馬鞭三根、尿壺一個、馬鞭纓繩十五個、蓆子一床、木元寶一個、豬蘆半片、銀套一個、豬頭形一個、豬肉一快、豬心一個、豬腿一個、豬肺一個、彩刀二把、肉架一個、紅大拾件、黑包頭十個、紅小四件、紅包頭十個、紅褲四條、黃綾包頭十個、黃綾馬褂三件、青羽毛馬褂十件、開叉袍十件、元色縷邊軍衣十六件、五色旂十六個、黑旂十六個、大帥旂一個、官兵號衣十件、小條旂二十四個、大方旂三個、彩蝴蝶二個、灯彩云福二個、灯彩云灯十二扇、青水壹個、黑兒董八串、花灯十八盞、花園一場、白桃棚一個、亭子一只、花墻一塊、壠琴一塊、灯屏四扇、花盆四只、龍灯一條、水思八件、鳳鶴二只、雙頭人三個、高脚八對、牛坡一場、羅山寺一場、大山一場、彩山二塊、福祿壽三件、云壘一只、高撓四付、皂帽四頂、四色大旂四箇、大黑旂四個、紅西縐大褂一件、黑洋褲八條、藍紗袍一件、黃紗袍二件、黃僧鞋五双、洋草帽十六頂、礮底布靴八件、藍緞春領四條、紅鞭線二件、銅簪十支、假頭罩一個、假頭髮二十個、黃綾一疋、紅布一疋、大帽四頂、令箭二支、朝帽一頂、去翎一支、醫生

牌一個、金牌十二個、彩人頭十二個、金鐺七付、錯中錯全堂彩、豆腐架一個、京貨箱一個、搖鼓一個、夾火一個、磨子一個、水缸一個、彩刀五把、手巾四條、老虎灶一座、黃操衣二套、荷葉套一個、紅緞旂袍一件、一把拿一根、大彩馬一匹、朝珠一付、白棉布水衣十件、花布漏肚衣一件、白布勝襖六件、夏布僧背心二個、鷄草一個、紅洋布包頭九條、洋帽一頂、涼帽二十四個、虎頭牌二個、六合縣灯籠十個、鎗八支、刀四把、大刀一把、明角佛灯一個、地方帽十頂、布馬十八匹、油布四張、新中軍帽一頂、籐牌四個、紅洋一條、磁茶壺一個、黑虎頭帽八頂、弓箭八把、跑馬班一個、立憲灯籠八箇、招牌一張、櫃台一付、目蓮頭一箇、新壽星頭一個、龍頭尾一付、小鬼頭一個、嘉興府官灯一對、紅布四個、魚腸劍盆一箇、絨球十個、大小鬼頭二個、藍紗帽一頂、翠文堂一頂、翠文場一頂、紫金冠一頂、全草金一頂、九龍冠一頂、皮馬鞭一支、綢尼姑帽五頂、銅長杆一支、扎巾四個、修羅漢頭四箇、

十 劇場の組織

劇場の組織は、至つて複雑してゐて、ナカ／＼判かり憎いが、ザツト言つて見ると、房東と、財東と、前台と、後台との四部に分かれてゐる。房東とは、即ち劇場の地主、家主であり、財東とは、資本家のことで、即ち一切の道具、衣裳類を提供するもの、(時として房東と財東と同一人であることがある)前台とは、即ち役者を雇入れ、その日／＼の芝居を興行して行くもの、財東と頗る密接の関係がある。又後台とは、役者を統率して、舞台に關して一切を世話し、又毎日の藝題を取り極め、又前台に對して、役者や、芝居に關する事柄を相談するものである。その中、房東と財東とについては、いろ／＼な葛藤は、あまり無いが、前台と後台とには、いろ／＼な混雜が、常に殆んど絶えない。

(イ) 前台と後台

前台即ち營業方では、觀客や、警察との面倒も、時々はあるが、殊に多いのは、役者に對する給銀問題で、役者は、成るべく多くの給銀を貰はうとし、之に對し、營業方では、いろ／＼な口實を設けて、之を安くしようと謀る。其の結果、遂には役者から、臨時休暇と、拗ね出し、大に劇場を困らすことがある。又後台即ち樂屋方では、藝題の取り極めに就き、營業方との關係は固よりのこと、其の一座の役者中に於て、藝題のことから、人物の配合について、人の知らない種々な心配やら、苦情があり、殊に役者は一本立ちになると、其の名譽の爲めに、(利益も固より伴ふ)番附の前後を非常に争ひ、例へば、もと最後の幕か、最後から、第一か、第二に極めてあつたものが、若し役者の承諾を経ないで、前の方にでも變らうものなら、それこそ大變、役者は、大立腹で、其の不服を鳴らし、是非共自分の藝題を、舊の位置に置くことを請求する。若し之が聞かれなかつたならば、役者は、直ぐに休暇と出懸け、大に樂屋の親方と、營業方とを困らす。

(ロ) 前後台の人員

次に前台と後台とは、其の中に、各種の人員がゐて、それ／＼仕事を掌つてゐるが、大畧左の如くである、

- ▽前台
- ▽櫃房……興行主數人で會計をも担当する、
- ▽看門……劇場の門口を監視する、
- ▽賣票……切符を賣り或は見料を徴收する、
- ▽收票……切符を受取る、
- ▽寫票號頭……切符の番號を取調ぶる、
- ▽看茶……茶水を掌る、
- ▽送座……座席に案内する、
- ▽查堂……座客の人數を調査する、
- ▽衣包房……座客の着物や品物を預る、
- ▽寫報子……芝居の藝題の張出しを書る、
- ▽賣戲單……番附を賣る、
- ▽雜役……雜務に服する、
- (外に賣點心(菓子賣り)賣報紙(新聞賣り)賣烟捲(煙草賣り)賣鮮果(菓物賣り)あれども此等は、帳場に一定の賃錢を納めて商賣を爲す)
- ▽後台
- ▽老板……樂屋を監督し役者を取締る
- ▽管事……毎日の藝題を取極むる、
- ▽頭目……重に役者を雇ひ入れに往

- ▽催戲……毎日役者の宅に赴き番附を示し出演を乞ふ、
- ▽脚兒色……即ち役者、
- ▽場面……文武の囀方、
- ▽檢場……舞台上居て道具や役者の衣裳を着換えることなどを世話し又火彩を掌る、
- ▽管衣箱……衣裳箱を掌る、
- ▽管盔箱……冠り物箱を掌る、

(ハ) 劇場の經營

次に劇場經營につき、其の出費を、ザット計算して見ると、固より建築の大小と、設備の如何、衣裳、道具の種類に依りて一定しないが、普通の舊式劇場は、大畧左の通である。

- ▽管砌末……大小道具を掌る、
- ▽水鍋……湯水を掌る、
- ▽彩匣子……化粧道具を掌る、
- ▽梳頭的……鬘髮結ひを掌る、
- ▽看門簾……樂屋と舞台との界なる小門の簾幕を開閉する、
- ▽雜役……雜務に服する、
- (外に跟包的とて役者自身の使僕が居る)

建築費（土地を含む）約一二萬元乃至三四萬元

芝居用衣裳及道具 一等二萬元、二等一萬五千元、三等一萬元、
テーブル椅子其他雜件 七八百元、

十一 劇と警察

(イ) 管理、戲園規則

警察署は、劇場と役者とに對して、一種の取締權を有してゐる。北京では、京師警察廳（東京の警視廳に同じ）が、之を取締る。其の取締規則は、管理戲園規則と、管理戲班規則といふのである。戲園とは劇場のこと、戲班とは、役者の團體のことである。管理戲園規則に依ると、劇場の新築と、修繕には、必ず警察に届け出で、其の認可を経ねばならぬ。場内には、警官、軍官の出張席を設けて置かねばならぬ。毎日の藝題は、其の開始前に、警察に届けねばならぬ。新編の脚本は、豫め警察に届け出で、其の認

可を経ねばならぬ。かねて禁止の脚本は、演じてはならぬ、場内に軍人、優待席（無錢）を設けて置かねばならぬ。その他、演劇の時間、座席のこと、見料のこと、茶錢のこと、女座席のこと、夜芝居のこと等につき、種々に制定してある。又觀客に對して「怪聲叫好」として、變な大聲を出して、絶叫することや、夏日に肌脱ぎを禁じ、又芝居小屋の門前で、女優に對して、猥褻がましい振舞をするをも禁じてある。

(ロ) 税金その他

北京では、劇場の等級を、一、二、三、四等に分ち、税金を、一等毎日六元、二等毎日三元、三等毎日一元半、四等毎日一元と定めてある。興行しない時は、無論これには要らない。

管理戲班規則に依ると、役者の一座を組織する時は、必ず座主より、警察に届け出でねばならぬ。（科班即ち役者養成所も同じ）新編の脚本は、届け出で、其の認可を経たる上に開演すべきこと、淫猥の劇は演じてはならぬ。劇場と堂會とを問はず、芝居を

演る時は、必ず警察に届け出でねばならぬ。科班の子供は、愛護を加へ、決して虐待してはならぬなど制定してあり。又別に役者の衣服、殊に女優に對しては、妓女に似寄つた着物を着てはならぬ。又役者は男女を問はず、客に招かれ、酒席を周旋してはならぬと禁令を出してある。役者の營業税は、まだ設けられて居ない。
(以上の規則は、上海とか、天津とか、外國居留地に於ては、工務局に於て幾分支那劇場の規則や、習慣を斟酌し、別に制定してあるが、茲には掲げまい。

賣藝

靜亭主人

歌童粉旦妙粵婷。小戲多從嵩祝聽。賣藝最宜燈下演。夜間看要火流星。

賣座

時興小戲得人和。四大徽班勢倒戈。雖是園中不上座。原圖堂會綵錢多。

第五 興行

一 興行主

芝居の興業主には、或は一個人、或は數人組合、或は一種會社的のもの、種々あるが、其等の人々は、多くは、多年芝居の興行に従事するか、或は現に俳優であり、或は俳優上りで、資産あるものか、或は他の資本家から、資本を融通して貰つて、愈々芝居を興行することとなる。

二 劇場と俳優

俳優は、殆んど座附と同じき一定の關係ある俳優と、一定の興行主との契約か、或は他の親方に、一ツの俳優團を組織せしめて、それと約束して、給料や、日限を定むるのだが、どちらかといふと、興行主が、或る親方に、臨時に俳優の團を組織せしむるのが多い。そして一座の俳優數は、少くも五六十人から、七八十人、或は百人内外

である。其の外に、特にその土地に居る名優や、或は旅役者のその地を過ぐるものと契約して、二三日とが、一二週間とか、登台せしめることがある。又北京から、わざ／＼人を派して、上海に遣り、その地の名優を招聘したり、或は上海から、北京に遣つて来て、俳優と相談することもある。

(イ) 劇場と俳優の相談

その劇場と俳優との相談は、その土地では、單に口約束にて、毎日の給銀を定めるのだが、北京の役者を上海に呼んだり、上海の俳優を、北京に請じたりするときは、必ず一定の契約を訂結する。そして其の給料は、大概一ヶ月に若干と取り極め、又往復の旅費は、必ず劇場の負担となる。又名優になると、その滞在間は、一切の宿代を劇場から賄ふ。

(ロ) 茶錢と打炮三天

又一種の給料として、茶錢を以て極むることがある。これは、毎日一人の観客につき、或は三錢、或は五錢、或は八錢、十錢といふやうに、其の日々の観客の總數に、一人前の茶錢を掛けて、計算するのである。又「打炮三天」といつて、相當の役者が、初めて舞台に出るときは、最初三日間は、評判試みしとして演じ、其の後に、詳はしいことを取り極むることがある。

三 興行と季節

興行季節として、別に確とした一定の季節とはなく、北京や、天津や、上海や、漢口などは、多くは年中打通し、絶えず開演し、甚しいのは、一ツの劇場で、晝夜二回も興行するけれども、その中で、正月と、五月（即ち端午の節句）と、八月（即ち中秋）の三大節季が、矢張芝居の最も盛んなる時季で、園主も、俳優も、収入多く、いはゞ彼等の書込み月である。そして酷暑と、嚴寒とは、自然客數が少い。

節句の藝題

支那芝居には、毎年の節句／＼に、それに應じた芝居を、一種か、二種を加へて、演るのが、昔からの習慣になつてゐて、今日でも、北京の劇場でも、上海のでも、それを演つて、縁起を祝し、観客を引き付ける。例へば、正月には、紅鸞禧とか、硃砂痣とか、搖錢樹とか、打金枝とか、すべて芽出度のや、又は過新年のやうな滑稽ものを演じ、五月には、雄黃陣とか、斬五毒とか、すべて端午に縁のあるのを演じ、七月の七夕には、天河配とか、于蘭盆（即ち盆會）には、蘭盆會とか、八月の中秋には、陰陽河（一名賞中秋）とか、すべてその節句相應な芝居を演るのだが、その日は、各劇場、何れも、大入りで、帳場の方でも、役者の方でも、ホク／＼顔である。

四 演劇時間

演劇の時間は、南北を通じて、晝芝居は、午前十一時頃から、夕刻の六七時まで、夜芝居は、六七時がら、十二時前後まで、平均六七時間、多くて、八時間である。そして晝から、夜に打通して、續けて演るのは、普通の劇場には、全くない。又支那

では、晝芝居のことを、日戲、或は早戲といひ、夜芝居のことを、夜戲、或は晚戲といふ。北京にては、以前は、日戲のみで、夜戲は、許されなかつたが、民國以來は、夜芝居も演つてゐる。又開演することを開鑼といひ、閉幕、即ちハネルことを散戲といふ。

五 毎日の幕數

幕數は、大抵少くも、七八幕から、多くて、十幕か、十一二幕である。その一幕に費す時間は、普通長いのが、一時間か、一時間半、短いのが、三四十分、平均すると、四五十分が多い。最も長いになると、二時間も三時間も、かゝるものもあるが、至つて稀である。但し一種の大劇を打通して演るときは、三時間も、四時間もかゝるが、これは、容易に無い。

一、幕の時間

僕が各劇について、計算した時間の數種を擧ぐると、左の通である。

落馬湖(二時十五分) 海慧寺(二時) 美人計(一時二十五分) 滾釘板(一時二十分)
 翠屏山(一時) 長板坡(一時) 烏龍院(五十分) 三國誌(五十分) 醉酒(四十五分)
 岳家庄(四十五分) 武家坡(四十分) 樊江關(四十分) 陽平關(三十七分) 馬鞍山
 (三十五分) 二進宮(三十分) 伐子都(二十五分)

六 俳優の登台

俳優の登台は、日本などとは、大に違ひ、名題役者は、普通一幕に出るのみで、演じ畢ると、ソコソコに歸つて仕舞ふ。(稀には二幕勉強することもある)そして中等のが、二幕位で、三幕も勤めるのは少い。けれども、下等になると、何處も同じく、幾度も出て出るのである。

七 俳優の配當

俳優の配當は、序幕は、下手のみで、段々進んで、上手になり、後の幕になる程、上等の役者が出で、殊に終りと其の前の二幕が、最も呼び物である。概していふと、中頃から後の幕は、すべて聞かれもし、見られもする。又稀には中程に名優を挿むこともある。

八 藝題の排列

戲目、即ち藝題は、毎日毎晩、取り變る。多くは、一幕物、或は數幕もの、中の一幕を擇んで演り、稀に續き物を演ずることもあるが、それも多くは、一幕づゝ日を換えて演るので、一日に同じものを續けて演ることは、殆んど無い。その毎日毎晩の藝題は、後台老板、即ち樂屋の監督が、芝居の性質や、土地の人氣や、演過の數日などを、種々に考へて、それづゝ選び、それを各俳優に役割を定むるのだが、その配合は、大抵文劇と、武劇と、艶物と、滑稽物とを、種々入れ混ぜ、一幕毎に、種類の異つたのを演り、其の比例は、十幕ならば、文が四、武が三、艶が二、滑が一位である。

そして三ツの武劇は、大抵、最初と、中間と、最後に分けて演る。

九 流行の芝居

劇場で、平常演る芝居は、土地の人氣によつて、幾分づゝ相異があり、北京で大人の藝題でも、上海で演れば、餘りに評判せず、上海で持て囃さるゝものでも、北京に來れば、何でもないとはいふものがある。けれども、これは重に、役者の藝能如何によつて定まるもので、名題役者が、其の十八番を演りさへすれば、南でも、北でも、歓迎を受けないことはない。私が調査によると、南北を通じて、平常屢々演るのは、大抵左の通である。

▽文劇

空城計、南天門、三娘教子、桑園寄子、文昭關、李陵碑、武家坡、玉堂春、二進宮、斬黃袍、打龍袍、六月雪、捉放曹、硃砂痣、釣金龜、

▽武劇、文武劇

帆蜡廟、四杰村、惡虎村、長板坡、白水灘、花蝴蝶、鐵龍山、艷陽樓、金錢豹、落馬湖、嘉興府、收關勝、金山寺、取金陵、戰宛城、鐵公鷄、

▽艷物

梅龍鎮、烏龍院、得意緣、紅鸞禧、打櫻桃、辛安驛、少華山、小放牛、破洪州、打花鼓、虹霓關、

▽滑稽物

請名醫、花子拾金、丑表功、送親演禮、過新年、瞎子逛燈、打皂、連升三級、

十 芝居の廣告

毎日の番附廣告は、海報、或は戲報子といつて、その日、その晩の藝題と、優名と（昔はたゞ藝題のみを書いて役者の名は書かれなかつた）を、廣い赤紙か、黄紙に、金文字入りに、筆太に大書した、一枚もの、或は二三枚ものを、城門の出入口とか、大通りの四辻など、毎日一定の場所に貼り出し、又門報子といつて、一藝題づゝの番

附紙が、劇場の門口に貼り出され、又場内に貼り出さるゝのは、堂報といふ。又近年は、大小の新聞紙上に、毎日番附を廣告するやうになつた。又明日の番附を、大畧印刷したものを、前日観客に配布したり、大道に於て、往來の人々に送つたりする。

十一番 附

各劇場では、毎日番附を印刷したものを、演劇中に、場内にて、一錢づゝに賣る。これを戲單兒、或は戲單子といふ。ズット昔、北京の戲單は、小さな黄色な紙片に、唯藝題のみ、而かも其の畧名を、筆で書いたものであつた。又各地の戲單も、もとは一定の筆法があつて、丁度我邦での昔の芝居や、今でも見るが、相撲の番附に見るやうな、肉太く、普通の文字とは、一寸違つた文字を、巾六七寸に、長さ一尺許りの赤色の支那紙に、木版で印刷したものだ。

近年來、次第に其の形式が變はり、木版ものは少く、多くは、活版を用ひ、各色の西洋紙に印刷するやうになつた。そして其の様式は、下部に藝題を排列し、各藝題の

上に、重なる役者の名前を掲げてある。上海の某劇場では、一時戲單の裏面に、各劇の筋を、極く簡単に説明したのを印刷したことがあるが、今日では殆んどない。私は、昔の戲單や、各地劇場の戲單を、隨分澤山所藏してゐるが、紙面の都合で之を掲げることはできぬが、其の一例を口繪に掲げて置いた。

十二番 觀客

見物人は、官客と、堂客とに分つが、官客とは、男客のことで、堂客とは、女客のことである。(北京では、民國以前には、婦人の觀劇を禁止した)そして女客の席は、必ず樓上で、男客のは、必ず樓下である。劇場によりては、樓上を半分女席に、半分男席に分けてゐるものもある。又女客のない劇場は、樓上も男客である。併し支那の風俗で、男女席を同うすることは、まだ出来ない。劇場の入口にも、男女分座の四字が貼り出されてゐる。勿論改良劇場では、樓上で、一棧敷買ひ切れば、男女同席を許さるゝものもある。

十三 噓方

舞台に於ける噓方は、前にもいつたやうに、大鼓を打つものや、胡弓を弾くものや、又は銅鑼を鳴らすもの、月琴を弾くものなど、ズラリと、舞台の後面に並んでゐるが、其の各噓方の座席の位置は、何れの劇場も、大抵一致してゐる。その中では、單皮鼓と、夾板とを、兼ねてゐる一人を中心に置き、その他の樂手は、殆んどそれを取り圍んでゐる。梆子劇のときは、梆子を敲くものが、その最後に居る。又その中で、鑼と鈸とを敲くものは、立つてゐるが、其の他は、すべて腰掛けてゐる。

十四 觀劇料

見料は、支那の劇場では、別に木戸錢といふのはなく、たゞ席料のみである。改良劇場の中には、入口で、切符を賣るものもあるが、普通は、切符でなく、客が場内の座に着いてから、見料を取りに来る。その外には、洗臉（顔を拭く）代とか、戲單（番

附を印刷したもの）代とか、茶代とか、菓子代とかで、日本從來の劇場のやうに、芝居を見ながら、酒を飲んだり、飯を喰つたりすることは無い。（上海改良劇場には、食事の出来るものもある）

さてその席料は、勿論俳優の優劣によつて、非常に上下するのだが、すべて棧敷が高く、平土間が次である。普通一人分上等で、四五十錢から、七八十錢、最も高く、一圓から、二三圓位、中等で、三四十錢から、五六十錢、下等で二十錢内外、又樓上の一圓（即ち包厢七八人から十人位を容る）を買ひ切つて、普通三四圓から、七八圓、稍高くて、十四五元から、二十圓内外である。そして洗臉代が、一度一錢から、二三錢、戲單代が一錢、茶錢が、四五錢から、高くて十錢、菓子代は、固より一定しないが、普通一皿十錢内外である。

十五 座賣の横着

支那の劇場では、昔からの習慣で、いろ／＼な悪風があり、我々外國人は固より、

支那人でも、少しく心あるものは、その習慣を非常に厭がつてゐるが、その中で、座賣り（即ち座席を世話するもの）と、茶賣り（大抵座賣りが兼ねてゐる）は、實に厭な悪風を持つてゐる。その座賣りと、茶賣りとは、大抵同じ人間だが、座錢に就ては、餘りに悪いことはないが、一方茶錢については、實に厭なことが多い。例へば、劇場で、客が座に着くと、直ぐに茶瓶と茶碗を持つて来る、客が飲まないといつても、強いて之を置く。それに就て、何時も、喧嘩が始まる。又茶を飲むに定まつたところで、その茶賣りは、如何にも横着で、客の方で、黙つて居ると、ナカ／＼湯をさしに來ない。又芝居のハネまでには、まだ多くの時間があるのに、その茶瓶を頻りに持つて行かうとする。

彼等の唯一の目的は、茶代にある。湯が冷めやうが、無くならうが、彼等は、全く無頓着である。そして茶錢は、一文でも多く貰はふと請求する。劇場通の話に、彼等は、苦力にも及ばない最下等の人間許りであるといふが、成程その人相を注意すると、十中八九までは、監獄にでも入りさうな險惡な相を帯びてゐる。

十六 祭日と休息

前清時代には、齋戒といつて、大廟や、社稷壇等の祭日、又は忌辰といつて、歴代の天皇や、皇后やの死なれた命日には、全國の劇場を通じて、すべて興行を禁せられたものだが、民國になつてからは、此の禁は、全く解かれた。そして支那の芝居は、大抵一年打ち通しに演つてゐるが、役者や、劇場で、祭日として、休業するのは、一年に、僅々三日である。

その中で、陰歴の三月十八日は、所謂梨園の祖神祭、五月三日は、靠箱會といつて、樂屋の衣裳箱や、道具箱に關する一種の神祭、又十二月の下旬に、劇場が休業するとき、即ち多くは、二十四五日前後には封台（舞台を封する意味）とか、封箱（衣裳箱や道具箱を封する意味）とかいつて、日を定め、神を祭るのだが、これ等の祭日には、各劇場は、すべて休業し、劇場や、或は別に大きな料理屋に、神座を設け、役者や、興行關係者は、すべて其處に集合し、いろ／＼な儀式があり、終つてから、一同飲食

するのである。そして封台後、大晦日まで、大抵十日か、一週間位は、各劇場共、全く休業し、元旦から一齊に開演する。

十七 催戲と十八番

催戲といふのは、毎朝劇場から、一人を役者の宅に遣り、其の日の番附を書いたものを渡し、登台を乞ふのであつて、即ち役者を招待するといふ一種の習慣である。若し其の日に、右の催戲人が来ないときは、最早招待しないのであるから、役者は、固より劇場に往かない。又給料や、藝題の順序などに關して、役者が、駄々を捏ねることがあり、之を俗に「拿橋」といふが、其の際は、催戲のものと、役者との間に、種々な争論が始まることがある。

(イ) 得意の藝當

又どの國にも、役者には、それ／＼得意の藝當があつて、日本でも、故團十郎の十

八番といつたら、先づ勸進帳を算へ、故菊五郎の十八番といつたら、誰でも直ぐに鬼男辨天小僧と判するやうに、支那の役者にも、それ／＼十八番がある支那では、この十八番のことを、拿手好戲といふが、昔の大名優であつた程長庚の十八番は、文昭關といつて、列國時代の伍子胥を扮する芝居で、どんなに劇場が、不景氣の時でも、彼が此の芝居を演ると、風が吹いても、大雨にでも、何時も札止めといふ大景氣、戦長沙も得意なのであつた。

(ロ) 譚鑫培と梅蘭芳

先年死んだ譚鑫培にも、いろ／＼十八番があつたが、中にも賣馬とか、瓊林料とか、碰碑とかは、大評判の出し物、又老優孫菊仙の十八番には、魚腸劍とか、罵楊廣とか、三娘教子とか、逍遙津とかがあり、老十三旦には、花田錯とか、辛安驛とか、紫霞宮とかがあり、故劉鴻升のには、三斬といつて、斬黄袍、轅門斬子、斬馬謖があり、又一探といつて、四郎探母があり、梅蘭芳の得意なのは、天女散花があり、尙小雲のには、玉堂春があり、吳鐵菴のには、失街亭と、擊鼓罵曹とがある。

第六 開演

一 芝居の開演

いよ／＼劇場で、芝居を興行するときには、北京では、普通その門内に、雲や、虎や、酒甕や、橋の形や、牡丹の花、柳の樹、石碑などの造り物を並べ飾るのだが、これは其の日に演る重な芝居に用ふる道具の一部である。又門口に高く赤色の木札（園名を書く）が吊り下げらるゝ。そして開場前一時間ばかり、銅鑼と太鼓が、デヤン／＼／＼と、非常に八釜しく鳴り響く。第一幕が、開台戯（或は開場戯）といつて、我邦の三番叟に當り、普通「天官賜福」といつて、北斗星、福の神になるのが、一人假面を冠つて出て来て、縁起の目出度いのを舞ふのが通例である。

それから、本幕に入り、段々と演じ去り、演じ終り、終りの二幕を、壓軸子、大軸子（或は壓台戯ともいふ）といひ、それが終ると、鳴り物が一寸止んで、普通二人の子供役者が、舞台の前面に並び立ち、少し腰を前に屈めて、観客を見送るの禮を爲す

が、これを金榜、或は唱戲的送客といひ、やがて喇叭がブーブーと鳴つて、芝居がハネとなる。

これから、演劇中に於ける舞台と、樂屋と、観覽席の状況を、掃溜的に、ザツト説明しよう。

二 舞台の實況

(一) 上場門と下場門とは、必ず一人づゝ、暖簾（即ち台簾子）の開閉を世話するものが居る。

(二) 俳優が初めて舞台に出るのは、必ず上場門、即ち出口で、劇の終りに、收まり込むのは、下場門、即ち入口である。

(三) 劇中には、時として俳優が、下場門から出ることもあり、又兩門から同時に出ることもある。

(四) 武劇の戦闘中には、多數の兵士が、旗を持ち、槍を提げつゝ、上場門から、下場

門へ、或は下場門から上場門へ、ゾロ／＼と、幾度も駈足にて出入することがある。

(五)旗持や、槍持などは、大抵二人一対づゝになつて、舞台に出で、左右に分れて並び立つ。

(六)一劇の初めに、武將が出る前には、必ず其の部下が、先つて舞台に出で、婦人が出るときには、必ず侍婢が最初に出る。

(七)劇の初めには、大抵役者が一人づゝ、名乗つたり、獨語したり、唄つたりする。

又武將が五六人、舞台の前面に並び立ち、一人づゝ、順次に名乗りをする。

(八)内唱といつて、俳優が樂屋の内、即ち上場門の門口に立ち、簾布の蔭で歌ふことがあり、又内唄といつて、樂屋内で、一齊に鬨の聲を揚ぐる(勿論武劇)ことがある。

(九)舞台に出てゐる役者と、樂屋の出口にゐる役者と、互に問答することがある。これを「搭架子」といふ。

(十)武劇で、武將が初めて舞台に出たときは、大抵一人づゝ、手足を屈伸し、腰使ひを爲して、武威を示し、又下場門に入るときは、大抵刀や、槍を、右の手に持ち、或

は、腕の下に挟み、又ツト前に突き出し、キリ／＼と、左足を先きに舉げて蹈張り如何にも威勢よく見える。

(十一)役者の眼使ひ、足踏み、體の使ひ方など、多くは、囃方の拍子に合せてする。

(十二)武劇の立ち廻りのときは、非常に混雜して騒がしく、塵が盛んに起り、又旗持兵士などには、半裸體のがある。

(十三)武劇のときは、或は、高處の鐵桿に飛び付き、ブラ吊つて、種々と曲藝らしいのをやり、或は幾度も宙返りをして、時には、欄干を越えて、座客の間に飛び落つる滑稽を演ずることがあり、或は電光石火のやうに、巧みに劍や、槍を使ひ、或は身體を舞台面から二三寸上に浮かせ廻つて、輕業のやうなこともする。

(十四)テールを積んだのや、列べたのを越え行き、或は飛び降りたりするが、これは、山か、城壁か、家の屋根に擬したのである。

(十五)大柱の側に立ち居るのは、其の身を隠してゐることである。

(十六)兩手を寄せたり、又擴げたりするのは、門戸を開閉するのである。

(十七)五色の鬼面をしてゐるのは、大抵、悪方か、敵軍の武將か、或は蒙古人、匈奴などいふ、もと漢人でない敵の人物が多い。

(十八)俳優が叩頭したり、腰を付けたるときは、必ず座布團を敷き、これが終ると、役者自身で、座布團をピンと投げ遣る。

(十九)俳優の兩方の眼の角に、小圓形の白い紙片を貼り付けてゐるのは、病人で、黒い布を頭の上に掛けたり、或は左右孰れかの頬へタに、細長い白の紙片を貼り付け、或は長い紙片の房を垂らしてゐるのは、何れも幽霊である。

(二十)人が斬り殺さるゝか、或は妖怪や幽霊の出るとき、或は、夢見るときなどは、必ずポット火を燃やす。

(廿一)馬騎が多く、出るときは、樂屋の内下、喇叭をブー〜と吹いて、馬の嘶くの擬する。

(廿二)首を斬る(重に樂屋で)ときには、必ず樂屋でブー〜と喇叭を吹く。

(廿三)裾を少し持ち上げたり、或は少し足を舉げて歩くのは、梯子を登るときか、船に

乗るときである。

(廿四)人が死んでからは、赤旗、或は赤布を以て、面を掩ひ、鬼神か、怪物か、幽霊の出るときは、黒旗を持つものが出て来る。

(廿五)中以上の俳優が、一節を唱ひ終るか、立ち廻りの後は、大抵一度も、二度も、三度も、横向きになり、袖にて、口を隠し、茶を飲む。

(廿六)演劇の隙間に、舞台の上で、俳優が、後向きになり、鏡をテーブルに据え、化粧を換え、装束を改むることがある。そのときは、衣裳を擴げ、或は二三人の役者で取り圍み、其の場を隠すこともある。

(廿七)演劇中に、道具や、其他種々なことを世話するのが、必ず一人か二人ゐる。之を檢場とか、走場とかいふが、別に黒頭巾も何も、冠つてはゐない。

(廿八)役者に茶を飲まするのは、中等以下は、右の檢場が世話するが、中等以上は、大抵自分のボーイが世話する。

(廿九)各劇の改り目には、無論幕はない。但し音楽の調子と、場面の模様とで、少し

く見馴れ、聞き馴るゝと、直ぐに判かる。

三 樂屋の實況

支那劇場の樂屋は、至つて粗末で、殺風景である。日本のなら、名題役者には、それ〴〵、化粧部屋が附いてゐるが、支那のには殆んど全く無い。有名な故譚鑫培でさへ、片隅の汚いテーブルに沿うて、化粧したり、衣裳を着けたりしたもので、一般の役者は、化粧も、衣裳も、些との定りなくやらかし、其の上、舞台に出てゐるのも、幾度となく、樂屋の一部を、頻繁に出入し、又一隅には、次の幕に出る役者等が、集まつて、下稽古をしてゐる。その混雑と、騒がしいことは、實に何ともいへない。左に其の概畧を示さう。

(一)樂屋も、ナカ〴〵の混雑と、喧噪との間に、樂屋の親方は、一隅の腰掛に坐つてゐて、一々俳優を見張つてゐる。

(二)劇神には、常に香花を供へ、俳優出入の際は、必ず一禮する。

(三)俳優のボーイが、風呂敷包や、一種のカバンで、衣裳類を運び込む。

(四)彼方には、顔を洗ふ、化粧、隈取りをする。此方には、いろ〴〵と装束する。

(五)俳優は、樂屋に来て、一切入浴などしない。又劇場に、浴場の設備がない。

(六)一隅々々で、二三の相手俳優が、互に台詞を取り交はして練習するやら、一人で、大聲を張り上げて、喉を試む。

(七)一方には、二三の俳優が、寄り合ひ、互に手を執り、體を廻はしなどして、練習してゐる。

(八)化粧装束を終へたものが、各所に對坐してゐる。其の場所は、役柄に依つて、大抵一定してゐる。彼等は、殆んど全く無言である。(これは古來からの規則になつてゐる)

(九)その並んでゐる人物には、長鬚で衣冠を着けた堂々たる大官もあり、アツサリとした文人らしいものもあり、或は甲冑姿の勇ましい武將、或は道化顔した婢僕、或は極悪人か、怪物か、鬼のやうな面をしたもの、或は靜がに品よき夫人、或は色目

使つて艶ボーイ色女や、藝妓、或は瘦せ衰へた乞丐、輾轉不遇の書生風、或は顔色憔悴せる腰の曲つた老夫人、或は優しく艶めかしい色男、一言すれば、百花爛熳、萬鬼聚會の圖である。

(十)俳優が演じ終ると、大抵間もなく家に歸るが、時としては、暫らく舞台の片隅に立つて、他優の芝居を見物してゐることがある。

(十一)樂屋通ひとしては、時々最負の男客があつて、入り來り、俳優と一二語言葉を交ふことがあるが、樂屋の規則としては、他人は一切入れないことになつてゐる。況して女客の人來などは、全く無い。昔は稀には男裝して忍び來ることがあつたさうだが、今日では、全くない。

四 觀覽席の實況

(一)觀覽席の方面を覗くと、矢張ナカ／＼混雜して、窮屈である。座客は、椅子や、狭い腰掛に、ズラリと並んでゐるが、少し身分あるものや、客を招待するとき杯は、

早くからボーイを遣つて、席を取らせて置き、其の他は、直接入つて來て、隨意に席に着き、後で席料を拂ふ。

(二)座客は、幕の進むに従つて、次第に増加するのだが、大抵は中頃からが、ズツト殖える。

(三)男客の上等なのは、大抵ボーイを伴ひ、女客も、大抵下婢を連れてゐる。女客の中で、風俗の華麗なものには、藝妓が多い。北京では、滿洲婦人が割合に多い。

(四)客は必ず茶を呑む。點心(菓子)として、落花生や、西瓜の種子が多く、其の他には、種々な菓子や、果物を、一皿づゝ持つて來る。料理を取つたり、酒を飲んだりすることは、全くない。

(五)客は、大抵持つて來る熱い手拭で顔を拭く。

(六)夏は、大抵中以下の客は、上着を脱ぎ、或は片肌を抜き、時として半裸體もある。近來は警察より之を禁じてあるが、ナカ／＼實行されない。

(七)俳優の歌の妙處には、各處の座客から、一種の高聲で喝采し、又胡琴(一種の胡

弓)の弾き方が巧みなときにも、喝采することがある。

(八)中以上の俳優が、歌ふときには、座客は、太抵各頭を揺るやら、扇子を使ふやら、又は指先や足先にて、歌に連れて、拍子を取つてゐる。

(九)俳優が下手で、歌の悪いときは、我邦でならば、引き込めとか、ヨセ〜とか、いふべきのを、大抵「抄倒罷」といつて怒鳴つたり、又「通」といつて悪口することがある。

(十)武劇の立ち廻りや、蜻蜓返や輕藝見たやうで、如何にも、巧妙で、興味を催すときは、矢張各處から、喝采したり、拍手したり、舌鼓を打つたりして賞讃する。

(十一)滑稽とか、稍猥褻のことを演ずるときは、座客は、一同ドット哄笑するか、或は一種の怪聲を放つて叫號し、或は近來は新式に拍手することもある。

(十二)座客は、演劇中でも、常に平氣に、高聲で、談笑したり、口論したりするので、満場如何にも騒がしく、餘程耳を敬て、注意してゐないと、面白い歌の文句や、肝腎の台詞は、薩張り聞えないことが多い。けれども、非常な名優が、大切な場所を

歌ふときは、流石の觀客連も、大抵靜まり返つて傾聽する。

(十三)俳優に怨意で最負な客があると、時としては、其の俳優が、客席に遣つて来て、一寸挨拶することがある。

(十四)演劇の中程を過ぐると、帳場の人々が、廻つて来て、席料を取り立てたり、切符を取り集めたりする。

(十五)座客の數を數へるものが、絶えず彼方此方に往來して、客數を計算する。

(十六)番附の印刷したのを、彼方此方に持ち廻はつて、客に賣り着くる。

(十七)菓子や、果物や、烟草や、其の日の新聞などを賣るのが、五月蠅ほど席間を往來する。

(十八)茶を世話するものが、時々来て湯をさし換ふる。

(十九)顔を拭く熱い手拭を十筋ばかり、一卷きに絞つたのを、土間の一隅から、一隅へ、或は下から樓上へ、客の頭上を投げやつて、新舊を交換するのだが、善く熟練したもので、容易に取り落さない。

(二十)演劇の終幕に近くと、其の晩のか、翌日の番附を大書したのを、樓上左右の欄干下に貼り出す。又印刷したのを観客に配布することもある。

(廿一)種々の関係と、多年の習慣とで、普通の劇場では、錢出さず只見の雜輩が、普通観客の後部に、五月蠅ほど、ヒシ／＼と推し寄せ、又従前は、兵士や、巡查が、是又無錢で、しかも大威張りで、観客の間に割り込み、如何にも面憎く、眼障りであつたが、北京などでは、近來別に一隅に、軍人優待所といふのを設けてあるので、此の弊害は少くなつた。

五 劇評と新聞

芝居の批評は、従前は殆んど全く無かつたが、(唯單行本として簡短に従者のことを評論した小冊子は二三種あつた)清朝の末葉から、少しづつ、流行を始め、民國になつてから、新聞の發行と共に、急足の進歩を爲し、今日では、北京でも、上海でも、天津でも、漢口でも、大小の新聞には、大概劇評といふ一欄を設くるやうになつた。け

れども其の劇評は、至つて粗雑で、簡單であつて、普通役者の扮装と、嚙音(ノド)と、台詞と、所作とにつき、頗る簡單に批評するのみで、劇の内容や、役者の眞實伎倆や、舞台との調和や、又は劇場の構造、舞台の設備、或は興行の方法などについて、詳細深刻に、評論するものは、まだ殆んど無い。最近に至り、劇場のことや、興行の方法などのことにつき、多少意見を發表するものもあるが、眞實に價值のあるのは、至つて少い。

劇専門の新聞としては、北京には、もと「戲劇新報」といふのが、唯一ツあつたが、今は無い。上海には、「圖畫劇報」と「晶報」といふのがあり、又雑誌としては、北京に詰らないのが一二ある。

又藝者の事柄と一緒に、役者や、芝居のことを記載する小さな新聞には、北京には、日知小報とか、消閑録とかいふのがある。そして劇評を書く記者は、ナカ／＼多いが、眞に實力のあるのは、至つて少く、其の最も重なるもの擧ぐると、北京では、汪隱俠とか、張謇子とか、陳優優とか、春覺生とか、聽梨外史などが居り、上海には、馬二

先生（姓は馮）とか、劉豁公とか、周亞父といふのが居り、凌雲閣主といふのは、北京と、上海に跨つて、劇評を書いてゐる。又奉天の盛京時報にゐる穆辰公といふのも、有名な劇評家である。

注意 本書七九頁俳優の詩作中、○○とあるは、文字の墮滅せるもの。

支那芝居（下巻終）

大正十三年二月廿六日印刷
大正十三年二月廿九日發行

著者

辻 武 雄

發行者

支那北京崇文門内堯治國胡同十號

支那風物研究會

右代表者 中野吉三郎

印刷者

支那北京崇文門内船板胡同卅五號

牧 野 源 一

印刷所

支那北京崇文門内船板胡同卅五號

華北正報社印刷部

支那芝居
不許複製
(定價銀壹元)

發兌

支那風物研究會
支那北京崇文門内堯治國胡同十號
支那風物叢書發行所
支那北京崇文門内船板胡同卅五號
電話東局二八三九號
電話東局二二二〇號

同北京崇文門内船板胡同卅五號

北京西總布胡同



三井會社名
三井會社
駐華特派員
三井會社
三井會社
北京出張所

電話東局一三九五八六

三菱會社

北京駐在員

東單牌樓大街路西
電話東局二四二〇號
電話東局二九三〇號

北京米市大街椿樹胡同

南滿鐵道株式會社

北京公所

電話東局一六八〇號

資本金 壹億萬圓 (全額拂込済)
積立金 七千三百萬圓

本店 橫濱

支店

日 本 東京、神戶、大阪、名古屋、下關、長崎
滿州方面 牛莊、大連、奉天、開原、長春、哈爾濱、浦鹽斯德
支 那 上海、漢口、青島、濟南、天津、北京
歐 米 倫敦、里昂、漢堡、紐育、桑港、羅府、シアトル、布哇、
アエノスアイレス、リオデ、ヂャネイロ
印 度 香港、西貢、新嘉坡
南洋方面 馬尼拉、蘭貢、カルカッタ、孟買、シドニー、スウラバヤ、バタビヤ

橫濱正金銀行北京支店

營業室 東局二八〇 全
帳 房 全三二二九 重役室 全 東局四六二 帳 房 東局二八一
重役住宅 全 三二〇 支配人住宅 全 二四五 副支配人住宅 全 九二〇

資本金 五百萬圓

株式會社 天津銀行

本店 天津日本租界旭街

電話 營業部 二九三

電話 同辦 三九五

電話 北京崇文門大街 二〇四二

電話 (東局一、〇三〇)

支店

蘇立金 支店

資本金 壹千萬圓

內外為替 荷為替

定期預金 抵當貸付

其他一般銀行業務精々御便宜御扱可申候

為替 取組 先

國內(上海、天津、漢口、九江、福州、廈門、汕頭、廣州、香港、長春、奉天、大連、濟南、青島)
國外(東京、橫濱、大阪、神戶、廣島、門司、福岡、長崎、京都、名古屋、小樽、函館、下關、台北、京城、倫敦、紐約、新嘉坡、孟買)

北京東交民巷西口戶部街

中華匯業銀行

總理 章仲和 專務理事 小林和介 支配人 李光啓

總管理處 東局四五九 專務室 東局二九六九 計算課 東局二九六七

支配人室 全二二七四 出納科 全二五七四 號房 全二二七八

内外爲替 荷爲替 金及銀預金及貸付
貯蓄業務 定期積立金

◎日本郵便局ニ於テ現金受拂ノ取扱便法
一本銀行ノ送金ハ(日本朝鮮台灣關東州ノ各地)御指定ノ日本郵便局ニテ
現金ヲ支拂ヒマス

一日本郵便局ヨリ送金ノ時ハ左記ノ振替口座へ御振込ニナレバ其通知ノ
到着ト同時ニ現金ヲ本銀行ニテ支拂ヒマス

(イ)北京本店ニテ受取ニナル方ハ大連三六七六番
(ロ)天津支店ニテ受取ニナル方ハ大連五七九二番
爲替 取組 先

一、日本全國

支那、上海、北京、天津、青島、漢口

北京打磨廠五十八號



大 東 銀 行

天津支店 天津日本租界二號電五二二
青島支店 青島若葉町 電八二一

上海支店 上海虹口乍浦口 電北二二二九
北京出張所 東單總布胡同 電東三三三三、同二五五

企業、投資、土木、建築

合 名 會 社 **大倉組北京出張所**

北京 北池子大街
電話 東局七八四號

北京東單牌樓大街

信義洋行

店主 越智丈吉

電話東局(二〇六號(店主專用))
一三八號

衛生材料硝子器、化學工業藥品等、雜貨輸出入代辦

信昌洋行

行主 齋藤振一

振替口座大阪九六五四番

本店 霞公府西口外 (電話東局一三七號)
分行 正陽門外大街 (電話南局八十七號)

大連 三井物產株式會社
青島 三井物產株式會社
天津 三井物產株式會社

正大會社

東洋拓殖
南洋鐵道
三井洋行
三菱公司
大倉洋行

五大會社指定旅館

扶桑館

北 京

郵政局私書函十四號

電話東局(六十三號)
九十三號

扶桑館別墅

電話東局三百九十號

弊館の革新

和洋御客室共設備完全
御食事は和漢洋共御隨意提供
長期滞在は下宿的御相談に應ず
茶代は堅く御断り
送迎は自働車又は馬車

宮内省御用
各宮家

佐野地氈部

營業所 北京精裱胡同

內蒙古林西縣東生泉

蒙古產業公司

總辦 薄益三

大連市山縣通

福華昌公司

相生由太郎

建築部、土木部 工事請負、設計、監督、鑑定、測量
商業部 各種建築材料、土地產物各種、石炭販賣其他一般輸出入

北京東單牌樓棲鳳樓

華昌勝公司

電話東局一七〇〇

支店所在地

天津日本租界壽街(電話二一三六)青島堺町(電話二九八)

引受代理店

出張所 濟南府商埠地大馬路

淺野セメント株式會社、日本ベイント會社、日本建築製
紙會社、中日鑛業株式會社、大同生命保險株式會社、旭
硝子株式會社(北京特約販賣)

資本金五十萬圓
獎勵金付貯蓄券賣出

本

社 天津日本租界壽街

(電話本局一六六五)

中日共益貯蓄株式會社

北京總代理店 天津銀行北京支店

(電話東局一〇三〇三四三二)

△西藥心品新式分裝大瓶小瓶均有出售